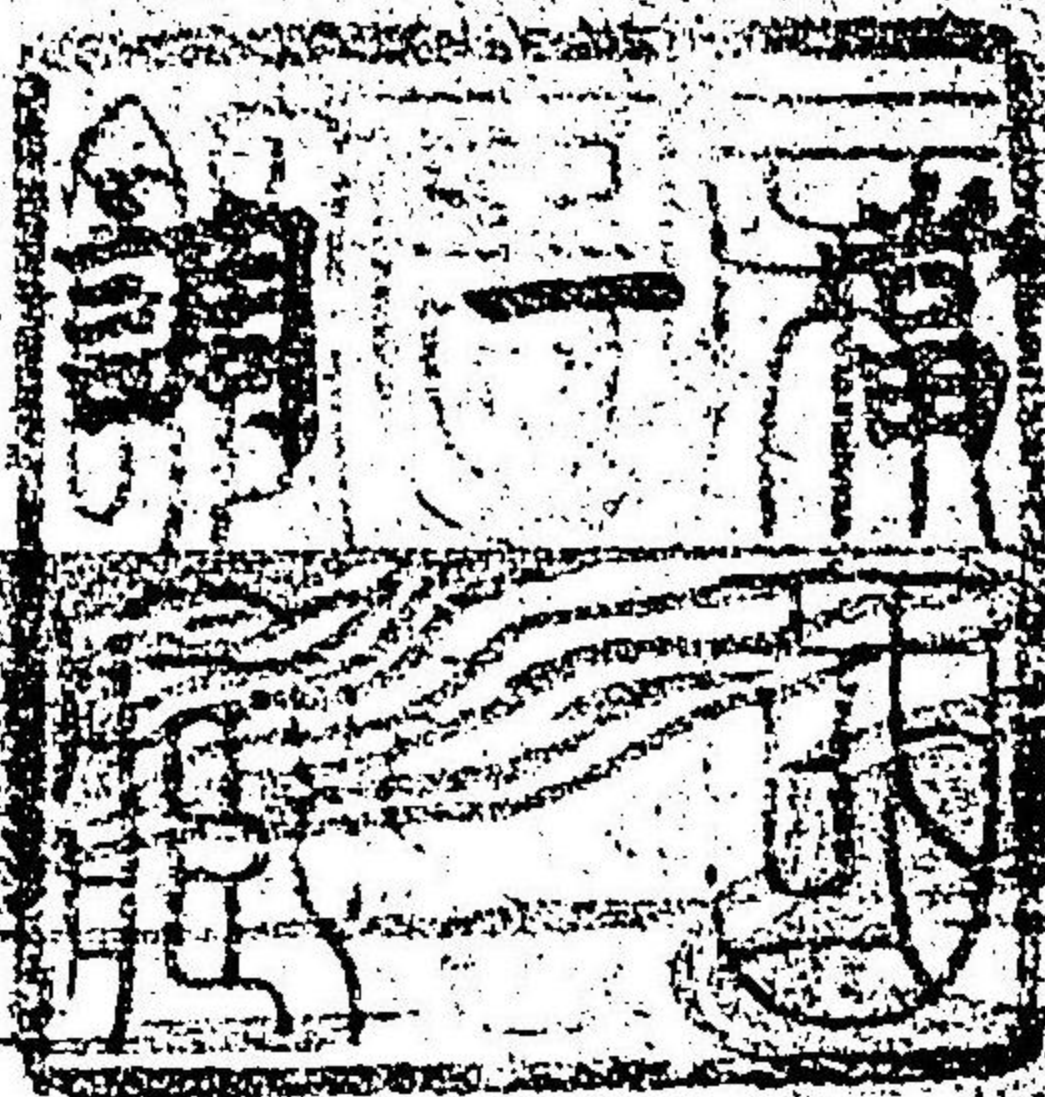


美 備 一 講 演



日 露 賦 手 談

第 五 編

此 村 欽 堂 發 行

40 9 26
內 交

はしがき

讀者は當時の光景を腹裡に疊み込みつゝらじ、第一軍が九連圍城の二城を陥
いれ、遼陽方面へ向つて進軍の時に際し、第二軍は遼東の一角に上陸して
金州の敵を破り、直に南山の嶺を陥れ、此に旅順攻圍軍を編成さるべき根本
を固められたるを。

第二軍の金州を破り南山を陥れたるは、其の目的に於て旅順攻圍軍を編
成すべき作戦の計画を納めたるも同時に、一方に於ては第一軍の遼陽方面に
向つて、活動すべき其の基礎をして、より鞏固ならしめられたるを。

左れば金州南山の役は、我が全軍の活動に就て非常に大切なる戦役たりしこ
素より云ふまでもなし。

斯の如く我に取りて大切なると同時に、敵に取りても大切なること云ふまでもな
し、實に南山に於ける敵の防禦工事は或は鐵條網を設け、或は電氣を流し、
鹿柴、藪等防禦に關する方法手段は一として施されざるなく、
洵に完全せる半永久的の築城工事を施して、我れを防がんき待り

防禦工事に斯の如く、加ふるに天然の嶺に據りて、旅順要塞も版籍を
孤下、精兵を配置して大に我に當りたり、此の故に金州南山の戦役は、其の
戦線短かきに拘はらず、我の苦戦難闘たりしこと、嘗て千八百七十七年露土戦
争の時に於る。ブレブナの激戦と同一なりしとは、其の當時を讀本内のある
校の物語にてありき。

而もブレブナに於ては、數回の突撃を爲すも終に陥る、能はざりしは、我は此
の南山に於て、前後九回の突撃を爲して、尙ほ其の効を奏せざりしも、更に屈せ
ず最後の大突撃に於て、斯は一呼吸に此の堅陣を陥れたるに至つては、古來
其の例なく、實に日本男兒の銳氣を中外に示し得て遺憾なし。

然り而して今や此の太羅戰の光景は、美富一調子が精確なる調査と、獨得の
雄辯に依つて、日露戰爭談第五編として、讀者に廣く示されり、讀み去
り、讀み去り讀み來たつて、如何ばかりの興味を感じるかは讀者の御覽に待つ。

明治丁年初秋

紫雲樓主人識



特11
800

新講談
日露戦争談

(第五編)

美 當 一 調 講 演
栢 沼 柳 佐 速 記

實にや男子と生れては死すべき時に死なざれば死るに優る耻
 むりとかや抑々露の戦争にて一時武者を轟かしたる旅順要
 塞司令官彼のステッセル將軍は矢は盡き太刀は折て後ち屍を
 山野に晒すこそ彼ステッセルが本分なるに能く命の惜し
 りけん容易に旅順を開渡し本國さして北へ歸りしかば忽ち露
 帝の逆鱗に觸れ軍法會議に廻はされて今や彼には哀はれにも
 死刑の宣告受たりと聞く之れに反して日本軍は上み將校より
 下兵卒に至る迄一と度合戦に望みし上は死するを知つて生き

るを見ず然れば世界に誇りたる露西亞大敵に打勝て國威を世界に振はしたる日露戦争概略談さればこれより口演に及ぶ

第一回

倍て前編に伺ひました、福井丸乗組の十六名は、栗田大機關士坂本某の負傷を始め、小池の戦死と云ふ様な有様で、一同福井丸を離れてポートに乗り移り、老鐵山の沖合さして乗出しました此の時敵の砲臺からと軍艦からとより打出す彈丸は、丁度此の福井丸乗組のポート一隻を目がけて、飛んで来る様で御座います、併し素より決死の勇士であるから、其雨の如き彈丸の中を物ともせず、力らを極めて漕出して居ります中も、廣瀬少佐は終始敵の港口と沖合とに眼をくばり、暗夜ながらも敵のサーチライトを利用して、我收容艇の方へとポートを急がせられました

だが、最初旅順の港口さして乗込んだ時も、其金山の前面を避けて老鐵山の方へ廻つて、夫から突込んだので御座いますから矢張り歸りにも其の初め參つた方角へ向けて進んで居られます、其の中に一彈烈しき響きと共に、廣瀬少佐の乗つて居られる、ポートの附近に落下して、一條の火柱が見へたかと思ふと平野水兵の頭からザツと沙水を浴せられました、其の横に居られた栗田大機關士も同様で、平野水兵は左りの手で顔中撫で廻しながら「ヤー露助めエライとを仕上がった、拳そのと打殺して仕舞つて呉るれば宜いに、ポートの横に彈丸と打ち込んで此の寒いのに頭から沙水をかぶつては實に死ぬより辛い、しかも頭ばかりと思ひの外、コリヤア全身すぶ濡れた、お釋迦様なら甘茶で結構だが、沙水と来ちやア閉口だ」とブツ／＼小言を言ひながら、其の邊を一寸搜つて見たが「ヤー大機關士殿貴下

も沙をおかふりでしたか」と問ひかけて見たが、此の時敵の探
 海燈は、他の方面を照して居たから、此の方は真ッ暗がり、
 が何所に居るやら、狭い艇中でも薩張り分りません、ソコで栗
 田大機關士は、随分の重傷であるから、今までウトンくと
 つて居られたが、平野水兵の聲を聞いて「オー平野水兵か、己れ
 も何だか沙を浴びた様だが、併し割合に冷たくないネ」「ナル程
 ソー仰しやれば」と又も自分の顔を撫で、見えて「ヤー可怪しい
 ぞ、如何に渤海灣の沙水だつて、水にしては生ぬる過ぎるが、
 ハーテナー」「ハーテナも何も無い、今時分氷の温いところがあるも
 んか、殊にぬるく」として居ると云へば、誰れか打たれて其の
 血汐の掛つたのではないのか」と注意した人が御座いました、
 「ナル程左様かも知れん、オイ、其所に居た面々が「イヤ誰も打たれた
 は無いのか」と云へば、其所に居た面々が「イヤ誰も打たれた者

ものは無い様だ、時に少佐殿は何處に御座る、少佐殿々々」と
 口々に呼んで見たが一向に返事が無い、ソコで皆々騒ぎ出し、
 廣くもあらぬボートの内を、呼んで捜り、搜りては呼びして
 見ましたが見當りません、サー大變だと言ふので、艇中大騒ぎ
 となりましたが、生憎なもので憐寸も無い、彼是する中に又も
 や敵の探海燈が、ピカリと其の方面を照しました、此の時廣
 瀬少佐の姿は、全くボートの中には見へないので判明致しまし
 た、一同は余りのとに涙も出でず「ヤー少佐殿は御戦死だ、シ
 カもお姿さへ見へない、イヤ此處に外套が残つて居る、先刻ま
 で此邊の圖面を開いて見て居られたが、此の残つて居る圖面も
 皆な血汐だ、ヤッ腦漿も付て居る「ではモ一愈々戦死に極つた
 オイ、是れを見い、此の外套に二錢銅貨ほどの肉片がクツ付
 て居るぞ、是れこそ少佐の肉片に違ひは無い、シテ見ると今の

一弾は、真正面に少佐に打付けたものと見へ、少佐の死体も云ふべきものは、此の二錢銅貨大の肉片ばかりだ、アーク立派な御戦死だ、平素あの御氣質で此の御戦死、嗚や御本望で御座いませう」と口には言へど一同が、杖柱とも頼みたる、大事の、指揮官の、戦死に心も掻き亂され、山を抜くも、大丈夫の、聲音も標ひ力からも抜け、しほれ切つては漕ぐ糧も、懶氣にこそ見へにける、此の有様を見たる栗田大機關士は、斯くてはならしと傷手に屈せず、一同に向ひて聲を勵まし「如何に諸君戦死は覺悟の前では無いか、廣瀬少佐が戦死されたとて、ボトの漕げん様などがあつて溜るものか、已に任務は了へたれど復命は済まんぞ、軍人たる者戦死計りが忠義では無い、サ一氣を取直して、シツかりやれ」と勵まされましたので、乗組一同も俄かに氣が付た様に、ズン／＼力らを込めて漕出されたが

此の時又もや一彈來つて、非常の響きで破裂をしたから「ソレ來た、又た誰かやられはせんか」と云ふ内に菅沼信號兵が「ソレ」と唸つて倒れた儘、物も碌に言へないので「オ一菅沼やられたのか傷は何處だ、確かかしら／＼」と皆んなが寄つてたかつて勵ましますが、何しろ脇腹の所に重傷を受けて居るので、ド／＼もてし言葉が出ません、只だ水々／＼と一言二言云ふから、「ヨ一シ分つた、分つたか生憎と此處には水が無いのだ、君オ一菅沼暫らく待て、モ一少して收容艇まで乗付けるのだ、君も男だ夫れまでの所辛抱せい」といたはる人もあれば「菅沼貴様何ちうザマだ、夫れ位ひの傷に男の何だ、氣の弱いにも程がある氣を確かにして待たれ／＼」と叱る人もあり、相變らず沖へ／＼と漕で居られたが、一艇の中に一人は戦死、三人は負傷と云ふので艇内は随分な混雑で御座います、けれども栗田大機

關士が指揮官代理として、負傷ながらも一同を勵まし、何でも構はん先づ收容艇に漕ぎ付けさへすれば宜いと云ふので、其の方面をさして漕ぎ進まれたが、丁度此の時敵の探海燈も消へて一時方角に惑はれましたが、其内次第に夜明け近くなつて、東の方角が少し白んで来たから「サアあの少し明るくなつて来た方面だ、アノ方面に向へば間違ひは無い、夜の明けぬ内に早く漕げ」
「一生懸命急いで居られたが、段々沖合に参ると向ふの方角に船らしいものが一隻見へる」「ヤー大變だ、向ふに見ゆるは敵の驅逐艦では無いか」「ドレ、ムー成程船だ、併しアレは敵の驅逐艦では無く、味方の收容艇では無いか」「或ひは左様かも知れん、ソノ極まれれば、モ一此方のもものだ、サ一確かり行け」
と其の船らしきものを目當てに、ドン、と漕いで行かれると、果して我收容艇艦隊で御座いました、ソコで皆々

手巾を振り手を上げて「オーイ」と打招きますと、艦號でも早くも夫れと覺り「ヤーあれは福井丸乗組の決死隊だ、サ一早く此の勇士を收容せよ」と言ふので直ぐに錨を抜いて迎へに参る、此方は一生懸命漕ぎ付け、難なく收容艇の右舷近くに漕寄せました、ソコで其の艦號の艇長坂本大尉は、満面に笑を含み乍ら「イヤ諸君御苦勞々々、應ぞ勇ましい働らきをしたであろう、時に廣瀬少佐は何處に居られる、栗田大機關士は見へん様じやが」と獨言の様に尋ねられるが、誰れ一人之に返答する者が無い、スルと其の内一人が大尉殿、只今少佐どのをお乗せ申しますぞ」と言ひさま、遺物の外套と圖面とを、乍らに收容艇に移しました、坂本大尉は之を見るや「扱ては廣瀬少佐殿は御戦死か」と云はれた儘、落る涙は瀧の如く、無言に右の品々を見て居られます、此時栗田大機關士は飯牟禮兵

曹に件はれて此處に參られ「艇長残念ながら、廣瀬少佐は戦死
 じや」と云はれると、坂本大尉は黙頭するのみで、疾くには言
 葉が出でません、漸く外套に向つて敬禮を爲し、右手に涙を拂
 ひ乍ら、イヤ栗田君、廣瀬少佐は立派な戦死で、御自分でも嘸
 を満足で御座ろう、サー君も早くお乗んなさい」と先づ大機關
 士を移し乗せ、次に小池の死体やら、重傷の坂井菅沼を乗せた
 上、他の乗組員も一同收容艇に乘移つたから、收容艇は沖合さ
 して全速力で進行されます、ソレするに其先きには驅逐艦の霞
 が待受けて居て、一同再び其の艦に收容されました、ソレは何
 故かと申しますと、此時丁度非常に浪が高まりましたので、小
 さい艇に多数の人が乗つて居ては、危険甚からすと云ふので、
 別に驅逐艦を迎ひにやつた次第だそうに御座います、其の時に
 菅沼信號兵は始終水々云ふから、甲乙の兵が打寄つて「どう

だらう、此の重傷に水は宜くないと云ふのだが、アノ位ひに欲
 しがるから、飲ましたら何うだらう」と尋ねますと、一人の兵
 曹が「オイ菅沼今少し待て、根據地に着いてから、先づ軍醫殿
 に見て貰つて、其の上で遣るなら遣ることにするから、マ一
 の間だ、忍耐しろ」と言はれますと、菅沼信號兵は虫の息
 ながら「イヤ待たれん、モ一己れは死んでも宜いから、只ッた
 一口飲ませて呉れ、コレだ」と手を出して拜む真似をする
 間も、非常に苦しい模様で「ア一命も何も入らん、水だ水
 だ水と……」跡は薩張分らないが、何しろ非常に水を欲しが
 るので「アノ位ひ欲しがるものを、若しも飲ませずに死なせたなら
 夫れこそ冥路の障りにもならう、兎角命と云ふものは天に在る
 水を飲ませたからと云ふて、屹度死ぬるものと極つても居るま
 いから、望みの通り一口飲ませたら何うだらう」と此の趣き

を霞艦長大島大尉にお話して、水を少々貰ひ出したから「サー
菅沼望みの通り水を持つて来たのだ、サー、水だ、水だ」と云
差出されますと、菅沼は嬉し涙をボロ／＼とこぼし乍ら「ア
難有い、實に何うも結構な水だ、是れでヤツと安心した」と云
ひつゝ口を出して、グツと一口飲みました、之が爲め一時
は一寸回復した模様で、天皇陛下萬歳……と呼びましたが、果し
て重傷に水を飲ましたから、此の萬歳を言ひ終ると同時に、バ
ッたり倒れて其の儘息は絶へて仕舞ひました、ソコで三人の死
体に、其他二人の重傷者に乗せて、根據地へ引揚げられたのが
丁度三月廿七日の夜明け過ぎで御座いました、ソコで朝日
艦長山田大佐、副長牛田中佐は、モ一先刻から待ち詫びて、モ
一我艦の決死隊は歸つて来そうなもの、どうしてこんなに遅い
であらうかと、頻りにお待ち兼ねの所であつたから、霞の影を

見るや「ソレ我艦の決死隊が歸つて来たぞ、オ、イ、廣瀬少佐は
何うした、栗田大機關士は無事か」と尋ねられますが、誰あつ
て一言も答ふる者が無い、其の内に集まつて居る將校下士卒の
人々が、一同聲を揚げて閉塞隊萬歳……と呼んで見たが、驅逐艦
の方からは一人も之に和する者が御座いません、加之ならず甲
板には人影も見へませんので、山田朝日艦長は不思議に思ひ、
「オ、イ、牛田中佐、是れは何うしたものであらう、モ一根據地に
来たのは分り切つたとしやないか、ナセ廣瀬は出て来んであろ
う、オ、イ、廣瀬少佐、ナセ」と呼ばれると、漸く出て参りまし
た一人の兵曹が、涙聲になつて「カ、艦長殿、廣瀬少佐殿は戦
死で御座ります……」ナニ廣瀬少佐は戦死だ、シテ栗田大機關士
は何うした「ハイ、栗田大機關士は御負傷で御座います、ヤツ栗
田も負傷か、夫れで杉野兵曹長は何うした「ハイ、是れも戦死で

御座います、其他に小池と菅沼も戦死を致しました。是れを聞かれた山田大佐は、餘りのとに言葉も出でず、牛田副長も只だ呆然、其他並居る將校下士卒も、誰あつて言葉を出す者も無く只だ先立つものは涙のみで御座いました。元來此の山田大佐と申す御方は、廣島縣の出身で、餘り言葉かつの多くない、沈着な方で、而かも強胆な性質であるから、容易泣く様な人では無いが、此の時計りは耐へ兼ねてか、眼一ぱいに涙を浮べ、暫しは物を言はれん位ひでした、斯くては果てじと、各自氣を勵まして、見るも無惨な少佐の遺物や、夫から戦死負傷者を朝日艦に移し、日を経て更に御用船山城丸に少佐の遺物を移し乗せ佐世保に向けて送られました。此の時此の山城丸が、朝日艦の前を通過せんとしたら、俄かに機關の働らさが止まつて、一時停船の止むなきに至りました。夫れを見た海軍の人々は、

是こそ廣瀬少佐の靈魂が、其乗艦であつた朝日に別れを惜み、船の進行を止めたものであらうなを噂し合ひ、内地の各新聞にもソンのことが書いてありましたが、其の實は山城丸の機關に故障が起つて船が止まりました。併し何にせよ時も場所も場所、で、突然機關が停まると云ふも不思議千萬なとで、或は靈魂の爲したとかも知れませんが、此時朝日の檣頭には、高く掲げし巾ひの、旗もしほれて下に低れ、程遠らぬ旗艦には、別れを送る悲哀の曲、風のまに、送り來て、勇士の征衣をしぼらせしが中にも栗田大機關士は、骨肉及ばぬ戦友の、廣瀬少佐に死別れ其身も重傷負ひながら、看護婦二人に助けられ、上甲板へと現はれ出で、海上遙かに山城丸の、進航するのを打ち眺め、頻りに別れを惜まれしは、實に悲惨とも哀痛とも、見る者何れも涙を流さぬ者は無かつたと申します。

福井丸のお話しは此の位ひで切上げ、跡は直ちに米山丸のお話しに移ります、米山丸の指揮官と云ふは、前申上た通り正木義太と云ひ、富士乗組の大尉で御座いました、其の指揮官附と云ふのが、島田初造と云ふ少尉のお方で、乗組員が都合十五名、矢張り千代丸福井丸に續て、港口目掛けて進まれました、其の乗込みの模様は、千代丸同様別に變つたお話しも御座いませぬから、お話しは愈々港口間近に近寄つた所から申上げます、私も旅順に参りました時分、此の米山丸の沈んだ所を一見致しました、第一回閉塞の報國丸の船尾の所に、鍵なりになつて沈んで居ります、實に何うも立派な位置に沈んだもので、此の沈没の以前、愈々モ一場所は此處だと思ふ所ろに、鹽谷二等兵曹……此の人が後方勤務で、島田少尉の指揮の下に居られ、夫から二名二等信號兵曹等も、此の鹽谷兵曹と力を合せ、必死とな

つて働らいて居られました、米山丸にも相變らず、敵弾は雨の如く飛んで来るので、一寸も油断が出来ません、其處へサ―チライトで眼を射られたので、モ―先きに居る敵も味方もドレが船やら一向に分りません、彼是する内に千代丸の橋頭に例の信號の火光がピカリとやつたので、「ア―是れで分つた、場所は大極上々、サ―此處だ」と一生懸命に進んで居られたが、頻りに飛來る敵弾は、端なくも島田少尉の傍へ破裂したので、島田少尉は此の破片で、背と肩とに重傷を負ひ、パツタリ倒れて人事不省となられました、然るに此時非常の混雑であつたから、他の人々も知つて居たのか知らんのか、誰とて少尉に打合ふ者が御座いませぬ、彼是する内に正木指揮官の「全速力沈没用意……と云ふ號令が聞へたから、ソレと云ふので、其の受持の人は爆薬に點火せんと飛出す一刹那、一二發の敵弾がズド

「ヤー」と米山丸に飛んで参りました、之を見た正木指揮官は、
 「ヤー」大分敵が打出して来たぞ、此の船の沈没まで幾度打出す
 か、氣を付けて敵へて見い」と大膽不敵の指揮に應じて二名鹽
 谷兩兵曹は「ソレ一つ、ソレ二つ、ヤー」打つは、モト是れ
 で七發だ、面白い、愉快々々」と雨の如く敵彈の來るのを
 數へて居られます、此の時餘り敵彈が來るので、其の煙の爲め
 四面は朦々として、花取り受持の人は、薩張り方角が分らなく
 なつて、何うしたら宜からうと心配して居ると、正木指揮官は
 赤松三等兵曹に向ひ「何でも構はん、其の儘進航だ」と其
 煙りの内を蒸進致されます、此の時又も飛來る一彈は、二名
 兵曹の傍に破裂したから溜らない、ワーツと言つた儘、パツタ
 リと其處に倒れて仕舞ふた、正木指揮官は丁度其の横の方に立
 つて居られたから、振り返り乍ら「ヤー」二名遣られたな、オイ

何うした何處をやられたか、大概な所なら起上つて働け
 と言ひつゝ其の方には眼もくれず、向ふへくと船を進めて居
 られます、ソコで二名兵曹は、随分酷い負傷ではあるが、指揮
 官の言に聞かされて、ムクムクと起き上り、相變らず働らいて
 居られるうち、今度は左の足を打貫かれました、けれども何處
 までも命の限りは働らんか、其の内に誰云ふとなく「ヤー」敵艦だ
 を盡して居られました、其の内に誰云ふとなく「ヤー」敵艦だ
 々々」と叫ぶ者がある、此の時敵の驅逐艦が進んで來て、頻りに
 米山丸に向つて大砲を打掛けます、素より驅逐艦の大砲だから
 ソンな大きなものでは御座いませぬが、彼等は有らん限りの
 彈丸を送り、同時に魚形水雷までも打出しました、正木大尉は
 之を見て「小癩千萬なかばい立て、其俄なれば冥土の供をさし
 て遣れ、ソレ機關砲を打テー」と先づ機關砲を打出して置

いて、夫から敵の驅逐艦を目かけ、一直線に突かけて参られま
 した、ソレで双方とも距離が段々に近くなり「衝突用意」の號
 令を掛けられたので、乗組員は一同小躍りして打ち喜び「ヤ
 愉快々々」假令驅逐艦でも、此の米山丸とブチつかつては、迎
 も沈没は免れない、フーッ」と聲を上げて乗かけんとし、
 正木大尉は「ムー甘い、ソコだ、此の船を乗沈むれば
 閉塞の助けだ、實にどうも結構な獲物だ」とアワヤアト息に乘
 沈めんとする一刹那、土屋二等機関兵曹は、船と艦とは近寄つ
 たり、イザ敵艦に飛び移り、敵の大將生捕らんと、豫て嗜む一
 刀携へ、敵艦目かけ飛込んづ勢ひに、有合の人を押し止めて、
 「コレ土屋、貴様は餘ッ程飛上り者だよ、御曹子義經どのさへ
 漁船を横に入隻飛びだ、此米山丸と敵の驅逐艦とは、斯う見へ
 ても未だ十間以上はある、夫れを飛超そうなんて、マ、大概に

逆上せて居れ」と頻りに引止められたが、實に此の時土屋の勢
 ひと云ふは、恰も夜叉の暴れたる如く、餘程凄かつたと申しま
 す、此の時味方の米山丸に在りし機関砲は、非常の速度を以て
 打かけたので、敵も大分弱つたらしい、ソコで正木大尉は「甘
 い、今ま一ト息だ」と云われ、内に、敵の一弾シューッと
 やつて来て、機関砲受持鹽谷兵曹の高股を打貫きました、けれ
 ども敵驅逐艦の打出した小さい弾丸であるから、何か一寸破片
 にでも傷つけられたものと思ひ、格別氣にも掛けず、相變らず打
 つて居られる内、又た肩先をやられたから、流石の鹽谷兵曹も
 ニケ所まで負傷しては氣の付かんとありません「ヤ、是れは
 不思議、何だか斯う妙な具合だと思ふて居たが、何時の間にか
 負傷をした、併し輕傷と見へて些とも痛みを感せん、是れなら
 マ、大丈夫だ」と云ひつゝ相變らず機関砲を打つて居られ

ると、後藤と云ふ人がやつて来て「オイ君は負傷して居るでは無いか、ナニ大したとは無いと、大したとが無いにせよ、其の儘にして置いては悪い、サー」己れが代つてヤツて居るから早く綱帯して来玉へ「サーニ其の心配は無用だ、是れ位ひなら君に頼まなくても打てる」「ソレは打てるかも知れんが、見る所重傷じやないか、サー早く綱帯所に行つて来玉へ」「馬鹿云へ、是れ位などが重傷で何うする、僕は何と云つても此處一寸も動かぬ」「サーそう言わずと……」「動かぬと云つたら動かぬ、グズグズ云ふと其儘には置かんぞ」と烈しい權幕で何うしても言ふとを聞きません、彼は是する内に船と艦とは、モ一追付けスレにならうと云ふ折しもあれ、又もや来る敵の一弾は、後藤の腕を打貫いたから、モ一機關砲を打つ所ではない、鹽谷は之を見「サー後藤貴様もやられたな、是れでは一連托生だ、サー己

れと一所に打とう」と二人の負傷者が、其の砲身に取付いて、頻りに敵艦に向つて打つて居られるが、餘まり近く寄り過ぎたので、二人は息も絶へ、一生懸命打出して居られた、此の時敵の驅逐艦も、米山丸に衝突されては、逆も溜らんと思ふたものか、危機一髪と云ふ所で、左方に回轉致しました「ヤツ仕舞ふた、ソレ追かけよ」と其の方面に進まれたが、何分驅逐艦は速力が早いので、如何に船足の早い米山丸でも、之に追付くとは出来ません、暫しは兩船並行の姿であつたが、其の内にト一遙かに隔たつて仕舞ひました、正木大尉は齒がみをしながら「ア一残念だ、ト一」取逃した、實に惜しいとをしたと飛来る、敵弾は打忘れて、其の取逃した驅逐艦のみ睨んで居られます、其の内に土屋機關兵曹は、船尾の方に用事があつて行

かれる途中、何かに躓いてドツさり倒れた。「ヤ、何だ人間だ、誰れだ此處に寝て居るのは、オイ負傷でもしたのか、ヤッ島田少尉どのだ、少尉どの……お怪我では御座いませんか」と頻りに呼立てまするが返事が無い、併し探つて見れば未だ息は通ふて居るらしいから、少尉の耳に口を寄せて「島田少尉どの……」と少尉どの……と呼び生けると、極めて微かな聲で「ソ、云ふは誰か、オ、土屋君か、君其邊に己れの軍刀の落ちて居るなら取つて呉れ」と申されますから、土屋機關兵曹は其傍にあつた軍刀を取つて少尉に渡しますと「イヤ難有う、時に未だ任務は了へんか、敵は何うした」と言われたが、餘程の深傷と見へて、モ、充分に物が言へません、ソコで土屋機關兵曹は、此處に置くのは至極危険であるからと云ふので、船橋の方

木大尉の方では「モ、驅逐艦は仕方が無い、爆沈だ」と云ふ中に、ド、ン、と云ふ烈しい響き、鹽谷兵曹は「サー甘い沈没だ、ボートを」と云ふ間も無く、正木大尉の聲として「ボート用意」の號令が掛りました、ソレと云ふので鹽谷兵曹は、負傷ながらもボートを降そうと、已に手をかけんとする一剎那、敵弾來つて腹部に當つたので、ヨ、ロ、と打ち倒れ、其儘直ぐ起き上りはしたものと、モ、働くの勇氣が無い、ソレ加勢しろと一二の兵が駆付け、難なくボートを降したが、丁度此の時船は愈々沈みかゝつたので、正木大尉は「コレボートの用意は出來たか、ボートは何うした」と呼ばれるうち、又た飛び來つた一弾は、正木大尉の肩に當つたから溜らない「ヤッ仕舞つた」と思はず聲を上げたから、傍へに在つた水兵達が「ヤ、大尉どの、御負傷だ、ナニ大尉殿の御負傷、夫こそ大變だ」

と皆な寄つてたかつて見れば、外套に大きな穴が出来て居る、驚ろいて綱帶所に引張り行かんとすれば、正木大尉は静かに起上りて「ア、もう宜い、ナ、大したことはないのだ、と自らから綱帶を施しなから「時にモ、爆薬には點火したのか」「ハイ、もう大分沈みかけました」「ム、宜い、」と實に落付き拂つたもので御座います、其の内に船はモ、沈みかける、所が前にも申上ぐる通り、此の正木大尉と云ふ人は、實に偉い御人物で、筒様な危険な場合にも、水深測量器の事を思ひ出し、其の器械は負傷した鹽谷兵曹が持つて居たので、之を以て充分此の沈没した附近を測量して置く様命せられ、此の危急の時に當つて、旅順港口がドロノ位、ひ深くしてあるかを測量されたそう、是れが抑も第三回閉塞に、多数の船を出された原因となつたのだと申します、彼是する内誰か「敵艦だ、」と云ふ者がある「ナ

ニ敵艦だ、何處だ、」と見る中に、敵の驅逐艦がやつて来て水雷を一发々射した「ソ、水雷だ」と云ふが早い、直ぐ味方の船に命中したのだから、忽ち非常な響きと共に大穴を穿ち、一層沈没を速かにする様なとで、見るうちに米山丸は、沈みかゝつて参ります、「ム、宜い、」と結核だ、サ、早くボートに乗れ、」と正木大尉は頻りに急ぎ立てられました、不圖島田少尉の居ないのに気が付て「ヤ、島田少尉が居ないぞ、誰か島田を見たら者は無いか」と云ふ口の下から土屋機關兵曹が「イヤ、少尉の居るのですか、アレはもうメ、です、重傷も重傷、逆も命はありませぬから、先刻私しが船橋の隅に運んで置きました、モ、今頃は御落命で御座います、ナ、島田少尉は重傷だと、ソレで打捨て、置くとは酷い、誰か早く船橋に行つて少尉を捜して来い」と命せられましたから、ソレツと云ふので二三の水

兵が、水と火とに攻められ乍ら、其處此處と飛廻つて見たが、何うも少尉らしいものも見當らないと報告した、正木大尉も、「ソレ程貴様達が捜しても分らんなら仕方ないが、折角のだから己れが一番捜して来よう」と米山丸に乘移られるから、「イヤ本船はアノ通り火が満ちて居ります、ソレに沈没に間もありません」と頻りに一同が引留めますると、「イヤ止めるな、己れは苟くも本船の指揮官だ、其指揮官が部下の生死も知らんでは相済ん、是非島田の生死を見届けた上でなければ歸らぬ」とイツかな止まられる模様が無い、此時以前の土屋機關兵曹が「大尉どの夫れ程貴下が思召すなら、私が一つ命に換へて見付けて参ります、何うぞ貴下は大切の御身、萬一などがあつてはなりませんから、是非とも御止まりを願ひます」と涙ながらに申しますから、正木大尉も詮方なく「ソレでは御苦勞じやが、今一

度見付けて貰ひたい「ハイ宜しう御座ります、屹度見付けてお目にかけます」と云ふかと思へば、忽ちに火煙隊々波浪滔々たる船内へと飛込みました「ア一立派には云ふたもの、迎も土屋は生きて還るとは難かしからう、實に不便なをした」と言な口々に惜しんで居られる、土屋機關兵曹も亦た、迎も再び「トに歸るとは出来んと決心して居るから、聲の有らん限り、島田少尉……島田少尉……」と呼びながら飛廻る中、不圖一條の繩が下の方に垂れて居るから、是れ幸ひじ其の繩を縋り、下の段に下りんと致される、ドーンと一發来た敵弾が、生憎と其の繩を打ち切つたので、土屋機關兵曹は其端みで、ドッさり下に尻餅をつき、アツと云ふて立上る拍子に、何物か手に障つたものがあつた、甲板の焼けつゝある火の光りで、慥かに島田少尉と分つたから、モ一生死を問ひかくる隙も無い、直ぐと引かつ

いでドシ／＼煙の中を上甲板へと現われて来たから、之を見付けた正木大尉を始め、一同は思はず萬歳を唱へました。ソコへ土屋は少々火傷をし乍ら「ヤ、漸々見付出すとは出したが、モ」ためです。と出て参りました。「イヤ、ためでも構はん、死んでも分れば満足だ、サー早く乗れ。」「イエ、大尉のからお乗んなさい」と双方から果てしなれば、大尉も然らばとて乗らんとされか、中々波が高いので容易に乗ることが出来ません。其の内一波高く米山丸の甲板に打付けたから、夫れ今だと云ふので、早くもボートに飛乗り、正木大尉は生死不明の島田少尉を、己が膝へと枕をさせ「サー確かり漕げ」と命令しつゝ、ボートは沖へ／＼と漕出しました。此の時敵艦又は敵砲臺からして、此のボートに向つて無暗に打出したので、幾度か舵機や櫂を折られました。或は應急修理を爲し、又は代りの櫂を立

て、非常の難儀を爲し乍ら、沖へ／＼と漕出されました。

第二回

前回の伺ひました米山丸のボートは、沖へ／＼と漕出しは致しましたものゝ、未だ／＼此の時分までは、相變らず敵艦が絶間なくやつて来て、其の距離も餘り遠くも無いから、實に危険此の上ない、加之ならす其の弾丸は、時々ボートの附近に落下して一寸の油断も出来ません、ソコへ以て来て例の探海燈は、眞正面にボートを照射致しますので、正木大尉も殊の外御心配の摸様で「どうも是れは困つた、敵は兎角此のボート一隻を目當てに、砲臺からも軍艦からも、總が／＼に打つ様に思はれる、仕方が無い、サー及ぶ限確かり漕げ」と申されると、傍らの一人が「サーニ大丈夫で御座ります、素より私どもは戦死の覺

悟ですすから、幾ら丸が来てもビクともするのじや御座いません
 何うせ打たれるものなら、念佛の代りに軍歌でも遣らうではあ
 りませんか、イヤー賛成々々、老人の死際には念佛が宜いが、
 軍人の死際には軍歌を歌ふに限る、サー皆んな一齊に始めよう
 ではないか「ヒヤ、大賛成、愉快々々」と直ぐに勇壯なる軍
 歌を唱へ出しました、此の時一彈ウナリを生じて、ポートの眞
 上をスレ、に飛ぶと同時に、忽ち其の先きに破烈致した、ソ
 コで一同樞の手を止めて「オイ、誰か今ので負傷をした者は
 無いか」「どうも誰れかやられた様だ」と類りに騒いで居ると、
 鹽谷兵曹が「ヤ、残念だ、又たヤられた」と云ふから、赤
 松後藤の二人が押寄つて「鹽谷君何處をやられたのか、君は今
 まで三ヶ所も負傷して居るじやないか、今度のは急所じやない
 か」と立騒ぐを、傍に居た鈴川が押し止めて「ヤ、ソ、う騒

がんで、も宜い、己れが一番近いから、介抱は引受けた」と云ひ
 さま抱き起さんとすれば「イヤ大丈夫々々、人手を借るほどの
 傷では無い」と口には言へど三ヶ所の負傷の上に、今又た一發
 頭部をやられた、尤も此の頭部の傷は格別の上には無い、ホンの
 かすり傷ではあるが、何分四ヶ所の傷であるから、頭部は勿論
 全身血に染んで、一寸見ると餘程の重傷の様に見へます、左程大事な
 で、甲乙の人が寄つて、其の髪の所を撫で、見ると、左程大事な
 場所でもありません「ヤ、是れ丈けの傷か、是れなら何でも無
 い、ホンの竹筥で突いた程の傷だ、鹽谷君安心し玉へ」と云ふと
 「ナ、ホンの竹筥で突いた程の傷だ、鹽谷君安心し玉へ」と云ふと
 併し随分苦ししいよ、寧ろそのと打殺して呉れたら宜かつたに」と
 云ふ聲も苦ししいよ、始終ウーンと唸つて居るのは、余所の
 見る目も氣の毒の至りで御座います、此の正木大尉は如何なる

お考へであつたか、突然「オールを立テ……」と叫ばれました。此のオールを立テの號令は、漕ぎ方を止め……と云ふとで、陸軍なら止まれ……で御座います、前申上げます通り、敵弾は雨の様に飛んで参ります、其の最中に持つて行つて、漕ぎ方を止め……の號令は、一向其意を得ん次第で、一同も命令なれば致し方なく、其の漕ぎ方を止めはしたものと、互ひに顔を見合して、時々正木大尉の顔を不審そうに眺めて居るのみです、此の時正木大尉が、ボートの進行を暫らく中止されたのは、餘り烈しく敵弾が来るから、之を避くるの手段を施されたもので、其の手弾と云ふは、此のボートを空船の様に見せかけんどの御考へであつたらしい、ソコで漕ぎ方を止めると間もなく「オイ」と云はれるから、上官の命令には落ちんが據るなく、皆々パツ

タリ舟の中に寝て仕舞ひました、ソして正木大尉のみは少しく頭を上げて、敵の砲臺を見て居られたが、寝てから十分も絶たん中に、段々と砲撃も減じて来て、暫らくすると敵の弾丸も来なくなり、向は弾丸の来ない計りで無く、探海燈も方角違ひを照して居るから、皆なくチヨキ、頭を上げて「オヤ、是れは妙だ、薩張り敵弾が来なくなつた、敵弾が来ない計りでなく、探海燈も消へて仕舞つた」「ナニ探海燈は消へたんじやない、アレ見玉へアノ方面を照して居るでは無いか」「ナ程砲撃も彼の方面に向つたな、アレは矢張り我々閉塞隊のボートに、ボートが一隻見ゆる、アレは矢張り我々閉塞隊のボートに違ひ無い」「無論ソレ違ひないが、彼のボートは千代丸のであらうか」「イヤ福井丸のボートらしい」「ナニ福井丸だと、今が今まで探海燈で眼を照され、一寸先も分らん程で、何うして君

は福井丸のボートと云ふを知つて居る「何うしてと言われると開口だが、兎に角已れは福井丸のボートらしい心持がする「ナ、ニ心持がする計りか、夫れでは逆も議論には成らんネ、ハッハッハッ」と皆々大笑ひになりましたが、成程此時敵の打つて居たのは福井丸で、丁度廣瀬少佐の戦死の時分であつたとは、後に判明致しました、箇様な具合で愈々敵弾も來なくなり、探海燈の光りも他方面に轉じたのを見届けたので「サ、計略は圖に當つた、今の内に急いで早く」と正木大尉の號令に、皆々一同に起き上り、左三挺右三挺合せて六挺取るよと見へしが、一息休んだ其の爲めに、力らも以前に十倍し、一生懸命漕ぎ出しました、間も無く又もや砲臺より、探海燈をパツと照したが、其の光りに米山丸のボートを漕出すのが見へたから、又もドン／＼打出しました、モ、此の時大分距離が遠

くなつて居たので、一發も當りません、全く無事に沖合遙かに漕出されました、箇様な沖合／＼と幾度も申上げますが、未だ中々敵弾の届かん程ではありません、尤も此の時はモ、小さい砲弾は届かないが、遠距離に利く砲丸は、相變らず時々ヤツて参ります、けれどもモ、左程の危険と云ふでも無いから、再び軍歌を唱へてドン／＼漕出したが、ズドン一發黄金山の砲臺から打出した砲弾は、ウナリを生じて飛んで來て、節面白く唱へ出す軍歌を打消し、漕出すボートの鼻の先きに落ちましたので、轟然たる響きと同時に、風も無いのに山なす波を起し、其波が舟に當つて轉覆しそうになつたので、サ、大變だ皆んな油断をするなど、互ひに勵まし誓しめ合ひ、櫂の手を止めて舟べりに縋ると云ふ有様、併し其處は流石に馴れた海軍人であるから、今や轉覆せんとする咄嗟の場合に、乗手は体を動かして舟

を平らにしたから、轉覆の災ひを免れ無事に此の大波を避くる
 とが出来ました、サーズなる風のためについた激浪でなく
 砲弾を打込んで一時的起つた波浪であるから何つまでもあろう
 筈なく、跡は元の平波に復したから、再び手を揃へて漕ぎ始め
 たが、丁度其の時一ト聲二タ聲唸つた人が御座いました「ヤ
 誰か又た唸り出したぞ、今の敵弾は水中に落ちたのだから、誰
 れも負傷する筈は無いが、ムテ誰であろう」と口々に云ふから
 正木大尉がヒョッと気が付て見ると、丁度自分の膝を枕にして
 居る島田少尉が、「ウーン」と唸つて居るので、「ヤッ島田少尉
 が蘇生した、オイ、皆んな島田が生き上つた、イヤ何うも逆
 も行くまいと思ふて居たが、是れは天佑だ、是れは難有い」と
 云われると「ナニ少尉殿が蘇生されましたか、ソレは何うもお
 目出度御座います、イヤ實に難有いとだ」と喜ぶものもあれば

「正木大尉どののはア、云われるが、あの通りの重傷で何うして
 生命があるものか、實に氣の毒千萬なとだ」と悲しむ人もあり
 ました、其の内愈々蘇生と云ふと分つたから「ヤ、もう大
 丈夫だ、愈々以て蘇生に間違ひは無い、時に何處を負傷したの
 だらう、オイ島田君確かりし玉へ、已れた、正木大尉だ」と申
 されましますと、島田少尉は恰も夢から覺めた様な顔で「ヤ、正
 木大尉どののか、ヤッ是れた、手の首がもげて居る「ナニ手の首
 が……どれッ」とすかして見られると、手の首が樞木の様になつ
 て、ソコ一面血に染んで居るから「イヤ困つたな、是れでは
 いかん、何か繃帯をする様なものは無いか、ム、宜しく」と宜
 い鹽梅に持つて居られた、辨當入れの袋を其の儘、負傷の腕に
 引込んで、其の上を確かりくびり「是れで大丈夫だ、ナニ是
 れ位ひ、確かりし玉へ」イヤ何うも難有う、時に米山丸は

何うなりました」と任務の尋ねられますから、正木大尉は
 カラ／＼と打笑つて「イヤ安心し玉へ、目的は充分達した、シ
 かも極上々の首尾だ」「イヤ其の一言を聞いて安心しました、モ
 思ひ残すとは無い」と喜ばれるかと思ふと、又々人事不省とな
 りました、併し幸ひにも收容後立派に回復せられたとは、實に
 お目出度とて御座います、米山丸の話は先づ斯んなもので、
 次は乃ち第四船彌彦丸のお話しに移ります
 彌彦丸は以前お話し上げた通り、私が昨年旅順に参りました時
 分一旦沈没しましたのを引揚げて大連に引て来て、其處で修繕
 をして居るのを見受けましたが、決して小さい船では御座いま
 せん、左様二千噸以上もあらうと云ふ鐵船で御座います、此の
 彌彦丸には前編伺ひました通り、森初次君が指揮官で乗つて居
 られました、ソして他の船と同様旅順に乗込まれたが、其の

乗込みのとは他船と大同小異であるから、其の邊の所は省略致
 します、扱て同船が定めの場合へ近づきますと、森君は始終左
 右に眼を配りて、千代丸福井丸米山丸の様子を眺めて他船に劣
 らず是非立派に目的を達しようと思ふて居られる中、先頭に立
 つた千代丸の橋頭に、信號の發火が見へたから、サー甘いぞ、
 福井丸も米山丸も同様だから、モ一暫しの猶豫もならんと認め
 が付たから「鑷おろし方」の號令を下されました、此の鑷下し
 方の役を持つて居たのは木下一等機關兵曹と、二等機關兵の近
 本太吉と云ふ二人で、此の近本のとに就ては前回伺ふた通り、
 家には七十に近い老母と妹とが居ります、又た其の母からの手
 紙を、森中尉が見られたとを、皆さんは定めし御記憶になつて
 居られませう、此の二人の母と妹とを持つて居る近本であるか
 ら、是非無事に歸して面會させたいとは、森中尉が情け深い考

へで御座いました、又た木下兵曹も此の近本とは、平素至つて
 懇意な中であるから、是れも森中尉と同様な思ひで、今度まで
 は是非死地に就かせたくないと言ふ考へを持つて居られました
 然るに此の鑑下しと云ふ任務は至難の役目で、船中でも一番敵
 彈の来る所に立つて仕事をするとゆへ、此の號令を聞くと同時
 に木下兵曹は「オイ近本、鑑の方は己れが下すから、貴様は其
 の邊の影に蹲んで居れ、ナリー己れは妻も子も無い獨り者だ
 から、假令戦死しても一寸も差支へはせんが、貴様は老母や妹
 も居るとだから、今度までは危ない所に近寄らん方が宜い、サ
 ーあつちへ行け」と押遣らんとされる。「コリやア怪しか
 らん、君は日頃の親友にも似合はず、僕を卑怯者にするつもり
 か、何の爲めに決死隊に入つたか、我輩は假令母が居ろようと
 妹が有ろうと、決死隊に入つて此の役目を受持つた以上、屹

度任務は果すつもりじや」と鑑下す時になつて、双方から喧嘩
 の様に争つて居ります、素より木下は兵曹、近本は只の機關兵
 で、下士と兵との區別があるから、公然の言語は君の僕のと云
 ふとは出来んが、是れは日頃の親友だから、豫ての話しも兄弟
 の様な具合で、ソレで箇様に差別なしの話しを致します次第で
 皆さんも其おつもりで御讀みを願ひます、箇様に双方から争ふ
 て、木下が何うしても近本に鑑を下させない、其の内に指揮官
 から、ナゼ早く鑑を下さないかと云ふ督促が参りました、ソ
 コで木下兵曹はモ一止むを得ないから、近本機關兵を突退けて
 サツサと鑑を下して仕舞ふた「サ一大丈夫、鑑は己れが下して
 仕舞つた」と云へば近本は齒を食しばつて口惜しがり「君は實
 に無情な人だ、ト」僕を卑怯者にして仕舞ふた、ソんな朋
 友の親切が何處に在るか、斯んなとで生残つては、母に合す面

目も無い」とゾン／＼腹を立て、船の方へ飛出して参りました。急ぐ、急ぐ、下しの了つたと見るや、森指揮官は一歩高く「沈没用意……爆発々々」と鋭い號令、此の一言を聞くや「サー来た甘いぞ」と飛出したのは小川大機關士、機關兵曹圖師熊太郎の兩君で、小川大機關士は點火の役目、圖師機關兵曹は其用意を見届けるのと、且つは小川大機關士の助役で御座います。ソレは若し小川大機關士が點火以前に戦死でもすれば、圖師兵曹は直ぐに代つて點火する役目です。ソコで號令を聞くや小川大機關士は機關部さしてツカ／＼と行かうとされるや、圖師兵曹も續いて其の後から行かうとされるから、小川大機關士は後ろを振り返り乍ら「オイ／＼待て／＼、君は其處に居つて宜しい、點火は僕一人で澤山だ、マ／＼／＼、僕のを居玉へ」と云われるから、止むなく其處へ立つて控へて居られると、小川大

機關士は其儘スタ／＼と仕掛けの所にヤツて行て、導火索に火を付けられたが、シュー／＼と云ふと忽ち火が消へて仕舞つた。ソコで小川大機關士は「オヤこいつは何んでも濡りが来て居るな」と獨語しつつ、又た點火すると又た消へる。「ヤ此奴は困つた、若しマ／＼／＼して居ると、船は下してあるが船の振方が狂ふ、モ／＼斯うなりやア命懸けた」と大膽にも爆薬から僅な所に火を付けたから、直ぐさまシュー／＼と燃へ出して、瞬く間に肝心の爆薬に火が移つたから溜らない、萬雷千雷一時に落下したかの如く、二千噸の鐵船も木ッ葉散らして吹飛されたと思ふ計り、其の凄まじき大音響と共に、心得たりと後ろの方に飛ぶさられたが、何分餘り近くに點火したのだから、思ふ様に逃げ果ふする事が出来ず、爆発の勢ひで小川大機關士は、ヨロ／＼と打倒されました。元來此の小川と云ふ方は、随分胆の据

つた人で、朋友の内でも小川は満身是胆だと云ふ位で御座います。如何に豪胆のお方でも、此の火勢には溜りません、忽ちバツたり打倒され、起上らんとすれど、其處ら一面硝煙に包まれて居るから、何處が出入口だか少しも分りません、其の内敵の砲臺からは砲彈がヤツて来る、爆薬で毀れた所からは潮水が奔馬の如く退入して参ります、ソコで圖師兵曹は、何時まで絶ても小川大機關士が出て来ないから「オ、小川機關士殿、機關士殿御無事ですか」と二、三聲呼んで見たが、薩張返事がありません。「コリヤア仕舞ふた、何でも大機關士はヤラれた、併しヤラれたとすれば敵陣では無い今の爆発だ、若し爆発であつたら斯うしては居られぬ」と甲斐々々しく身仕度して、其機關部の方へ飛込まんとした一刹那、非常の勢ひで吹かけた硝煙と火勢で、忽ち息きが吐かれん様になり、モ、大機關

士々々と云ふて呼ぶとが出来る、ソレを呼ばうと思ふて手巾で打拂ふて見たが、ド、ド、ド、中々手巾や何かで此の火勢を拒ぐとは出来ない、圖師兵曹も遂には力ら盡きて、ト、ト、ト、煙りの爲め窒息して倒れられました、其の内に船は早や次第に沈み行くと云ふ有様なれば、サー「ボートの下し方」と森指揮官が呼ばれますと、此役目は村上一等兵曹と杉本水兵で、此の二人が命令と同時に、手早くつり縄を切り落し「サー乗れ、早やく、」と言ひますから、森中尉は「ム、甘く行つた、モ、大丈夫だ」と已に其ボートに乗移らんとされたが、不圖思ひ出して「ヤッ小川大機關士が見へんぞ、圖師兵曹は何うした」と頻りに心配をして居らるゝ所へ、彼の錨下しの役目に當り、木下兵曹の親切を仇に思ひ、ヤケに飛出して居つた近本機關兵が来て「中尉どの機關部なら私が能く知つて居ます、是非私しをヤッ

て下さい」とツカ／＼と行かんとするから、森中尉は周章引止
 め「コレ／＼近本何をするので、一宜い貴様は其處に居れ、
 機關部には誰か遣る者がある」「イエ／＼是非私しを遣つて下さ
 い、夫れとも私しでは其事を仕遂げられんとお認めになつたで
 御座いますか」「ナ／＼ニそうでは無いが、貴様はいかん／＼と
 云われるは前編にも申上げた通り、此の近本に老母と妹とのあ
 るとを、森中尉ののが旅順乗込みの途中聞かれ、是非之を助け
 たいと思ふて止められたので、ツ／＼すると丁度此の時、ポ
 に乗らんと駈付けられた例の木下兵曹が、此事を聞くより是非自
 を遣つて呉れと願ふ、近本は素より一番に願出たのは自分であ
 るから、何うあつても行くこと云ふ、其他の者もイヤ私しを、イ
 ヤ拙者をと、死を争ひし決死の面々、何うも大變な騒ぎになつ
 て仕舞ふて、流石の森中尉も大に持餘して居られると、氣早の

近本は「是れ迄と思ふたか、並居る人を突退けて、機關部
 して飛出して仕舞ひました、ソレ近本を引止めよ、必らず死な
 してはならんぞと、大勢跡を追かけたが、近本は疾風の如く飛
 下りて、機關部に來て見ますに、大機關士は一旦は倒れたもの
 下りて、流石に豪傑の人であるから、破れた船の間から、攻め來る
 様に身をゾプ濡れ、人手も借らす起上り、ヨロめき乍ら出來る
 泣きに立付けば、「オ／＼近本か大丈夫だ、モ／＼此の小川に心配無
 用、此處は危険だ上甲板へ、早く上れと助け合ひ、行かんとし
 たる其の横に、窒息致して倒れたる、機關兵曹團長も、攻め
 來る沙に圍らすも、息よき返し頭を上げ、見廻す途端見合す顔
 「ヤ／＼兵曹殿か」「近本か」と互ひに無事を喜び合ひ、夢に夢見
 し心地にして、三人一所に手に手を取り、漸く上へと駈け上れ

ば、ソレと見るより森中尉は「ヤ、小川君も無事か、醫師も負傷は無かつたか、オ、近本も無事で歸つたか、ヤ、目出度い目出度い、サー、早くボートに乗り玉へ」と何うも其の時双方の喜びは非常なもので、嬉しさ餘つて双方手に手を握りしめ、抱き付きて漸々一同ボートに乗り移られました、早や此時は彌彦丸の船体は、僅かに上甲板を残すのみであつたから「先づ首尾よく目的は達した、萬歳萬歳、萬歳」と唱へつゝ其の儘沖合さして乗出されましたが、此の時米山丸福井丸のボートが、丁度敵の標的になつて居た時分だから、仕合せと彌彦丸のボートには、只だ一人の負傷者も無く、敵弾も僅張り飛んで来ないので、お蔭で方向も取違へず、無事に收容艇に收容されました、先づ是れで閉塞船のお話しはお止めと致しまして、是から順を追つてお話しすれば、露國艦隊の提督マカロフ中將戦死

の條で御座いますけれど、海軍のお話し許りでは、或ひはお厭きになりはすまいかと考へますから、お話しは轉じて愈々陸軍の方の合戦に移ります

第三回

借て愈々是から陸軍のお話しに移りますが、陸軍の戦争は月日の順序から申しますと、少々飛越になりますが、海軍の戦ひ許りでは御退屈ゆへ、是より陸軍の南山攻撃談に移ります、此のお話しをするに當つて、聊か述べて置きたう御座いますとは、今回の戦争は諸君御承知の通り、明治三十七年二月八日の宣戦から、翌廿八年奉天附近の會戦まで、大分の月日を経過して、其の間陸海軍ともに澤山の戦争が御座いました、是れを一々詳細に取調ぶるとは、最早私しも六十と云ふ老軀で御座いますか

ら、日本全国の師團を訪問して、將校下士の人々から、一々其の實戰談を聞くといふとは、百まで生きた所で一寸難かしいので、ソコで昨年東京へ参りました時に、野津元帥、西、大島の兩大將、高島中將方のお催ふしで、一席お話しを致したことが御座います、殊に黒木大將の自邸でも、一席の講話を致しました。が、其の時分各將軍方のお話しに、日露戦争の事は實に空前の大戦争であるから、希くは細大漏らさず話しをして貰ひたいが夫れは到底出來得るものでない、併し各聯隊が非常に苦戦をした所を、一部分づゝ講談に仕込んだら、随分出來んとはあるまいと思ふが、ソノしては何うであらうとお話しも御座いました。それから、私も昨今は其の方針を取つて、近日聯隊から始めて段々と材料を蒐集して居りますが、差寄り南山攻撃の時のお話しも、當時の歩兵第十八聯隊長石原大佐ものが、今日は當熊本の

の旅團長となつて居られますので、先づ此の十八聯隊長に就て少しく承つたと、夫れから當時第四師團は大阪旅團長西島少將閣下が、只今熊本第六師團長となつて居られますので、此の方に就ても少しくお話しを承つたと、御座いますから、重も一師團及び各聯隊は、一々未だ調べが屆きませんので、其の他の或る書類の内から、抜萃して講話に移す筈であるから、事實の點に於ては大なる間違ひは無いつもりですが、詳細のお話しが出來兼ねますのは、甚だ遺憾とする所で御座います、南山攻撃のお話しは以上述べた様な譯で、諸君も其のおつもりにて御讀下しを願ひ上げます

エー除談は扱置いて、南山の攻撃は第二軍乃ち奧大將の率いて居られた、第一、第三、第四の三ヶ師團兵で、此の三ヶ師團の

外に、第五師團も参加せられたので、南山攻撃の時は乃ち四ヶ師團を一軍團としておりました。全体一軍團と云ふは、一ヶ師團半からは軍團と稱へ、夫れ以上は場合に由り、或は三ヶ師團なり、或は四ヶ師團なり五ヶ師團なりと、一軍團とされるものたそうです。ソコで豫め此の第二軍の重なる方を讀みまして、以下戦争の時の御参考に供します。

▲第二軍司令部

- | | | | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|------|------|------|----|-------|
| 全 | 全 | 參 | 參謀副長 | 參謀長 | 軍司令官 | 陸軍大將 | 男爵 | 奧保 |
| 陸軍砲兵少佐 | 陸軍騎兵少佐 | 陸軍歩兵少佐 | 陸軍歩兵中佐 | 陸軍少將 | 陸軍大將 | 男爵 | 奧保 | 石坂善次郎 |
| | | | | | | | | 鈴木莊六 |
| | | | | | | | | 山梨半造 |
| | | | | | | | | 由比光術 |
| | | | | | | | | 落合豊三郎 |

- | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|-------|--------|------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 工兵部長 | 砲兵部長 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 副官 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 | 全 |
| 陸軍工兵大佐 | 陸軍少將 | 陸軍豫備大尉 | 全 | 全 | 陸軍歩兵大尉 | 陸軍騎兵大尉 | 陸軍歩兵少佐 | 陸軍騎兵大尉 | 陸軍歩兵大尉 | 陸軍砲兵大尉 | 陸軍砲兵大尉 | 陸軍砲兵大尉 | 陸軍砲兵大尉 |
| 阿部貞次郎 | 税所篤文郎 | 石光眞清郎 | 小澤三郎 | 田原小三郎 | 松岡保太郎 | 千葉和乎 | 河村正彦 | 佐藤小次郎 | 金谷範三郎 | 高柳保太郎 | 高柳保太郎 | 小野寺重太郎 | 小野寺重太郎 |

○第一師團(東京)

師團長	陸軍中將	貞愛親王
參謀長	砲兵大佐	星野金吾

步兵第一旅團長

陸軍少將 松本務本

步兵第一聯隊長

步兵大佐 小原正恒

步兵第十五聯隊長

步兵中佐 千田貞幹

步兵第二旅團長

陸軍少將 中村覺

步兵第二聯隊長

步兵大佐 渡邊武十郎

步兵第三聯隊長

步兵大佐 牛島本善

騎兵第一聯隊長

騎兵中佐男爵 名和長憲

○第三師團(名古屋)

砲兵第一聯隊長	砲兵大佐	兵頭雅春
工兵第一大隊長	工兵大佐	大木房之助
輜重兵第一大隊長	輜重兵大佐	奧村元信

師團長

陸軍中將男爵 大島義昌

參謀長

步兵大佐 島村千雄

步兵第五旅團長

陸軍少將 山口圭藏

步兵第六聯隊長

步兵大佐 南都辰丙

步兵第三聯隊長

步兵大佐 藤本太郎

步兵第十七旅團長

陸軍少將 兒玉忠

野戰砲兵第一旅團長	陸軍少將	內山 小二郎
砲兵第十三聯隊長	砲兵大佐	佐野 勝次郎
砲兵第十四聯隊長	砲兵大佐	藏田 虎助
砲兵第十五聯隊長	砲兵大佐	柴田 五郎
彈藥大隊長	砲兵少佐	町田 彦二
騎兵第四聯隊長	騎兵中佐	內田 廣徳
砲兵第四聯隊長	砲兵大佐	福永 宗之助
步兵第九旅團長	陸軍少將	安東 貞美
步兵第九聯隊長	步兵中佐	中村 無一
步兵第三十八聯隊長	步兵大佐	內藤 新一郎

步兵第十八聯隊長	步兵大佐	石原 應恒
步兵第卅四聯隊長	步兵中佐	關谷 銘次郎
騎兵第三聯隊長	騎兵中佐	中山 民次郎
砲兵第三聯隊長	砲兵大佐	島川 文八郎
工兵第三大隊長	工兵小佐	石栗 剛三
○第四師團(大阪)		
師團長	陸軍中將男爵	小川 又次
參謀長	步兵中佐	野口 坤之
步兵第七旅團長	陸軍少將	西島 助義
步兵第八聯隊長	步兵中佐	能美 成一
步兵第十七聯隊長	步兵大佐	川村 宗五郎

先づ箇様なお方々で御座いました、尙ほ是れに第五師團の全部
 が加わつて居りますが、當時第五師團は背面の敵に備ゆる爲め
 南山方面には向わず、別に或る方面に向ひられて居ましたから
 此の南山攻撃の下りには略致します、扱て此の第二軍と云ふも
 のは、何時編成されたかと申しますと、是れは三十七年三月下
 旬から、廣島或は大坂に集合して、初めて第二軍と云ふが組織
 されました、其第二軍の作戦計畫と云ふものは、旅順の要塞を
 海陸より遮断し、日本軍の根據地を大連にしよう云ふのが目
 的であつたらしく御座ります、ソコで四月の二十日頃から日本
 を發して、先づ此の三ヶ師團と云ふものが船でもつて、朝鮮は
 大同江の下流、鎮南浦と云ふ所に着きましたのが、丁度廿五六
 日頃であつたと覺へます、然るに鎮南浦に到着して以來、三日
 経つても四日経つても、一向何うも前進する模様が見へぬ、只

だモ一其處にジツとして居られるから、段々集まつた年少の將
 校方は、ソロソロ不平の聲が高くなり、「オイ、君、是
 れは一体何うするのだらう、モ一此處に着してから四五日にも
 なるが、凡ての準備は出来て居るだらうが、何時までも船
 の中にマゴクして、上陸もさせんと云ふのは、全体譯が分ら
 んじやないか、「ソリヤア君、ソ一だが、萬一敵の軍艦にでも逢ふ
 てはならんぞ云ふ用心から、我が軍艦の護衛を待つて居るの
 はあるまいが、或ひは然らんだ、併しソ一幾日も待つ位ひ
 なら、上陸して進んだ方が早いでは無いか、我々は何の爲めに
 此處に来て居るのか、戦争に来て居るでは無いか、戦争に来て
 居るものが、斯う長く引張つて置かれては、實に溜まつたもの
 では無い、是れは一つ大隊長に尋ねて見ようではないか、「併し
 大隊長でも是許りは御存知あるまいネ」「大隊長が知らんのなら

聯隊長、聯隊長が知らんなら旅團長まで伺つて見よう」と云ふ
 様な騒ぎで、是れは獨り年少の將校方許りではない、下士兵卒
 に至るまで、段々不平の聲が出る様になりました、併し軍紀が
 殿しいから、下等社會の様に喧嘩腰で議論に出掛るものも無く
 羨やけになつて暴れ出す人もありません、彼是する内モ一早や
 十日許りを過ぎました、ソ一なる少年少將校や兵士許りでなく
 聯隊長でさへモ一は溜らなくなつて、ブツ／＼お小言も出る様
 な譯で、碓泊中なる幾萬の將士が、皆な不平と不満とで持つて
 居ると云ふ有様、若し是れが平素であつたなら、ヤケもあろう
 し議論もあつたであらうが、何しろ大戦争を目の前に控へた門
 出のとであれば、何れも勘忍袋の緒をゆるめく／＼り、只だブツ
 ツと不平を漏らされる位ひで御座いました、所るが此の碓泊は
 充分深いお考へのあるとで、是等が所謂軍略の大事な所で、

隊長方にさへ秘密であつたが、其の實第一軍乃ち黒木大將が、
 九連城を攻むるとになつて居て、其の九連城の攻撃が果して其
 の功を奏するや否、是れば戦はん前から分る様はありません、
 殊に相手は世界第一の強國と誇る露西亞の軍隊、其の強國と云
 ふのは彼が誇る許りで無く、世界各國も其の強國たるを許して
 居る位ひ、其の露國に向つて初めての手合せをする第一軍が、
 萬々一にも失敗を取つたならば、此處に碓泊して居る所の第二
 軍は、直ちに其方面に向つて、第一軍を援助せんければなりま
 せん、否な次第に由つては第一軍に代り、全部其の方面に向つ
 て進めると云ふと、參謀本部の方でも計畫されて居られたら
 しう御座います、然るに五月一日愈々九連城は、第一軍の爲め
 陥落したと云ふ報に接し、其捷報と同時に始めて大本營からし
 て、奥第二軍司令官の方に御通知があつたので、ソレではと云

ふて最初の計畫通りに、遼東半島の中央に上陸し、先づ金州城
 を取り南山の敵を攻め、ソノして旅順と遼陽との連絡を遮断す
 るの目的で、時を移さず鎮南浦を抜鑄致されました、其の向ふ
 所は何處かと申しまするに、遼東半島は丁度中程、鹽大嶼と云
 ふ所に到着致された、此の日は明治三十七年五月五日で御座い
 ました、元來此の到着地點は、種々の小字が御座いますが、
 此の邊一帯を總稱して鹽大嶼と申しますから、グダグダしい地
 名は申上げません、此の鹽大嶼と云ふ所は、大連と金州灣との
 間に在ると思へば、大した間違ひは御座いませぬ、軍隊上陸の
 順序は、先づ第一番に第三師團、夫れから第一師團、次に第四
 師團と云ふ順序で御座います、此の上陸の時に鹽大嶼に向つて
 一番右の方から、第三師團が上陸致しましたが、此處は非常の
 遠淺で、此の上も無い困難を極められました、ソレで次の第一

師團は、第三師團の上陸地點から、ズーツと左りの方に上陸致
 しました、此處は大分海も深いから、第三師團程の困難には
 遭ひませんでした、ソレから引續き第四師團も其處から上陸し
 他の特科隊も同様でありました、扱て此の第三師團が上陸をし
 ましたのは、乃ち五月五日で御座いました、上陸をして段々敵
 情を搜つて見ると、十三里台と云ふ所に、大分敵が集まつて居
 る様な話し、夫から又た普蘭店附近にも大分敵が居るとのと
 又た皮子窩にも多少の敵兵が居ると云ふとが分りました、ソコ
 で第三師團は上陸と共に、直ぐ船中の勞れを打捨て、命令に
 由り關谷聯隊長は、二ヶ大隊を引て普蘭店方面に前進された、
 ソノするとも古屋師團の歩兵第三十三聯隊第一大隊長奈須仙太
 郎君は皮子窩に向はれる、第一師團の全部は先づ十三里台の敵
 を驅逐することに相成りました、ソコでお話しの順序として、此

の普蘭店の小戦から初め、夫れから第一師團砲兵の、五月十六日十三里台の砲射に讀み移ります

第四回

借て普蘭店方面に向はれたる關谷聯隊は、同地方に向つてズン
前進されましたが、敵は其方面には僅かに歩騎約三ヶ中隊
足らずであつたから、之に向つて直ちに戦闘を開きましたたが、
何分一聯隊に對する三ヶ中隊足らずの敵であるから、是れは勿
論お話しする丈けの戦ひも無く、忽ちの内に敵は退却して、同
方面は關谷聯隊の占領する所となつて、其の儘同地方配備の任
に當らるゝことになりました、夫れが爲め南山攻撃の時に、此の
關谷聯隊丈けが、彼の大戦に參與致しません次第です、併しな
がら此の方面は、何時遼陽方面から敵が南下して来るかも知れ

ません、萬一にも南下して来るがあつたら、南山攻撃の我第
二軍は、實に腹背に敵を受けねばならぬこととなりますが、幸ひ
にして此の時までは、敵が南下し来らんから宜しう御座いまし
たが、實に此の關谷聯隊の任務は、容易ならん大役で御座いま
した、扱て又た奈須大隊長の向つて居られた皮子窩の方には、
僅かに敵の騎兵が若干居たのみで、是れは無敵戦闘を交ゆるま
でも無く、直ちに追ひ散らして、其方面の電線を切斷し、敵の
連絡を斷つて仕舞はれました、之も敵が小敵であつたから仕合
せで、味方に一人の死者所ろでは無い、微傷を負ふた者も無く
所謂及に血ぬらさずして目的を達し、何等故障もなく同地を占
領致されました、右様の都合になつたので、サ、是から先づ金
州南山の方に向つて、味方は前進運動を始め、其處らを占領し
た結果、旅順と遼陽との連絡を遮斷すると云ふとに決しました

が、前段お伺ひ致しました通り、其の金州南山まで進んで行く途中、十三里台と云ふ所に、大分多数の敵が居ると云ふから、先づ之を打拂ふた後でなければ、金州への前進は出来ませんが、直サテ第二軍の全部上陸を了へて、種々の準備が出来たから、直ちに前進命令は發せられ、各隊何れも前進するとはなつたが、何うも日本内地の道路とは違ひ、非常な悪路である其の上、鹽大澳か十三里台に行くには、非常な險悪なる山坂があり、す、其の坂道を越ゆるに、第一難儀をするのは野戦砲隊の前進で、御座います、御承知の通り野戦砲と云ふものは、馬に曳かして行くので、山砲なれば随分馬に背負せても行けますが、野戦砲と来ては徹頭徹尾ソンの出来ません、ソンであるから此の砲兵の前進を始められて以來、嘗め盡した困難と云ふ困難は到底口にも筆にも盡せぬ位ひで、或る時は歩兵の人々が、其の

砲車に附て馬に力らを入れ、其の坂道を押し上げると云ふ様な事も御座いました、其の砲車を押すと云ふのは、歩兵が平生の任務でないから、何うも命令があつたにせよ、三人は減り五人は減り、思ふ様に歩兵から加勢を致しません、ソンは只だ砲車を押すのが厭や許りではない、先きには歩兵が進んで居るから、今また大砲を押し上げる加勢などして居れば、自分自身は自分の隊から後れねばならぬ、其の後れた爲めに折角出て来た戦争に間に合はん様では、単怯者の名を取らねばならぬ、自分自身は歩兵である、大砲には何の關係も無い、早く敵に遭つて手柄がして見たいと只管戦争を急ぐ所からして、ツイ心ならずも砲車の跡押しを打棄て、前進すると云ふ有様で、決して此の歩兵に無情な考へは少しも無い、只だ戦争と云ふのが頭から離れないから、御座います、ソレで砲兵の方では益々困難して、敵に入つてもい

キなりばつたり、砲車の横に倒れた儘、露を褥に草まくら、夢もロクく、結ばれぬと云ふ、實に何うも此の上も無い難儀な役で御座います、全体十三里台と云ふ所に、其の時分確實に下ノ位ひ敵が居るかと言ふとは分りませんが、先づ第一、第四の兩師團とて、之を攻めるとになつて居りましたそうです、併し十三里台を攻めるにせよ、此の歩兵計りでは攻むることが出来ません、何うしても砲兵が敵臺を打ち毀して、歩兵を援助致しませんで、歩兵の前進と云ふとは出来ませぬ、ソコでは是非とも大砲をと焦慮しましたが間に合ひません、全体此の十三里臺と云ふ所は金州半島の地頭である、ソレであるから此處には少くも一ヶ師團位ひの敵が居るであらうと云ふお考へ、其の上土人の話しにも多数と云ふとであるから、扱こそ二ヶ師團で攻撃すると云ふとに決定された次第で御座います、第一師團の進まれた方

は、第四師團の進まれた方から見ると、少しく道路も宜しかつたので、第一師團の方は第四師團に比べると、其の砲兵も餘程困難が薄う御座りました、彼是する内に十三里台も近くなり、近づくに付ては斥候が出る、敵情偵察がある、其の結果として敵は餘り多数でないと言ふとが分つたから、ソレでは第一師團大けて、吃度撃接が出来て来るであらうと云ふ見込みが立ちましたか何うだか、其の邊は軍機秘密で分りませんか、第四師團丈けは此の十三里台攻撃には與らず、第一師團丈けで攻撃すると云ふとになつたものと見へ、また第四師團の全部揃はない以前に、愈々戦争を始めるとになりました、此の時第一師團長は、御承知の通り伏見宮貞愛親王殿下で、參謀長は砲兵大佐星野金吾君、御附武官が三原少佐と云ふお方で御座います、ソレで此の時砲兵隊長は兵頭大佐であつたが、五

月の十六日にはモ一愈々十三里台近くに押寄せられました。ソコ
 で大隊長の水谷少佐や小野寺大尉は、最早陣地の選定も出来た
 から、敵の陣地に向つて大砲を打ちかけ得るを見定め、夫より
 直ちに敵砲兵の陣地進入を行はせました。所が此の十三里台の
 敵の砲兵陣地は、思ふた程ソ一堅牢では無く、味方から見ると
 適當の場所に砲を据へて居るのが能く見へます。陣地進入が済
 むと直ぐ敵の陣地に向つて試射を致します。砲兵では此の試射
 が一番難儀なもので、九連城攻撃の時一寸お話申して置きまし
 た。機だが、試射とは文字の通り試みに打つて見るので、先づ三
 千五百米突とか何とか、大中隊長が目測をされて、夫れで打つ
 て見ないと、何の位ひ距離があるか分りません。ソコで最初の
 一發では當るやら當らないやら一寸見當が付かん、何うしても
 二三發打たねば、何千何百と云ふ確かな標靶が付かないとな

つて居ります。然るに敵は疾うから此の邊の地利は知つて居り
 ますし、平素實彈射撃をして、何處まで何千何百、彼處まで
 が何千何百と云ふ目標が、チャーンと立つて居りますから、味
 方の砲兵が進んだかと思ふと直ぐ打ち出しました。所が其の地
 點が今申上げます通り、敵は平素測量してあるのだから、一發
 打つと同時に忽ち我砲車の傍らに飛んで来て、曳火彈の彈子が
 パラ／＼と吹出しました。モ一其の一發で一二名の負傷者が
 出来た位ひ、ソコで味方の方では第一何千何百、第二何千何百
 と云ふて、二三發打たれ、未だ味方の砲彈は、一つも敵に命
 五發もドン／＼打出すし、敵の砲彈の爲めに我は五六名も負傷者が出
 中致しませんのに、敵の砲彈の爲めに我は五六名も負傷者が出
 来た云ふ有様、ソコで中隊長や小隊長が皆な集まられて、
 「どうも残念だ、實に遺憾に耐へん、サー早く／＼と水谷大

隊長の指揮の下に、小野寺中隊長は直ちに島少尉、林中尉に向つて「四千五百米突で充分だ、急ぎ打テー……」の號令で、有らんと限りの力を出し、味方一聯隊の三十六門、一時に非常の速度で打始めたが、御承知の通り日本の野戦砲と露國の野戦砲とは、其の製造に於て大分な違ひがあります、日本の野戦砲は敵の大砲に比して、砲身と云ひ車輪と云ひ、何れも小さい方で御座いました、其の上敵を打つ距離と申しても、露國式の彈丸丈には届きません、且つ露國の野砲は後進砲座式で、此の彈争時分には世界に比類なき大砲であつたと云ふとで、日本から一發打出す内には、敵は五發も打ち出します、ソコで日本砲兵の人々は非常の苦戦に陥られました、此の時島田少尉はヤツキとなつて「サー確かり打て、ナニ敵の大砲が後進砲座式でも何でも、些とも構ふとは無い、戦ひの勝負は必らずしも機械の

みには據らん」と部下を勵ましてヤツて居られる内、ソラ来た島田少尉が受持つて居られた、四番砲車に打掛けられたので、島田少尉はト溜りも無く其處に打倒され、重傷所では無く、全人、人事不省に陥られ、是れと同時に上等兵の中島求作、伍長の伊藤國太郎など云ふ、照準手第一砲手小隊長を始め、五六名も倒され、此の有様を見て、如何にも残念至極だが、ソコで水谷大隊長は此の大砲の演れるまでは、一歩も此處を引くとはい出来ん」と右に左りに飛廻はりて指揮して居られた、が、菊池中尉受持つ砲車の所へ、二三發一時に落下して、九子が四方に飛散つたので、其處にも亦た二三名の負傷者が出来る、須藤大尉の中隊、附久保曹長も負傷し、須藤大尉も一發の九子を

味はれたが幸ひに至つて輕傷で血も染まん位ひですから、大尉は笑ひながら「オイ是れを見い、己れなどには丸が當つても皮一重破るとは出來ない、犬ころ同様な露兵の弾が、何うして我々日本軍人様に當るもんが、フツハツハ……」と自慢して居られる所へ、一發又た一發、都合三發まで飛んで来て、須藤大尉に當つたが、何うしたものか矢張り血の出る程には無いので中隊の兵どもは大喜びで「中隊長殿の体は石であらうが鐵であらうが、三發までロスの弾が當つたが血も出ない、斯う云ふ大次夫な中隊長どのがあれば、我々も心次夫だ、サ一露助の弾は弱いぞ、安心して打テ！」と打つて居られたが、此の時砲兵中の御者中原市五郎と云ふが負傷をし乍ら能く働いて居るので、兵頭聯隊長は之を見られて「何うも貴様は負傷ながら能く働いて居る、其の働らきは本官が確と認めたま」と申さ

れますと、之を聞いた他の兵卒も、聯隊長殿から賞詞を頂いたのは實に名譽だ、我々も同様お褒めの言葉を頂きたいものだ、云ふので、感憤の餘り必死となつて働いて居る中、絶へず飛び来る敵の彈丸、不幸にも水谷少佐の傍に落ちて、曳火彈子を吹き出したので、水谷少佐は喉の近方から頭部にかけて、非常な重傷を受けられたので、ヨロ／＼とされると同時に、バツたり其處に倒れられた、ソレを見ると附近に在る所の下士卒が押か

けて「ヤ一大隊長殿の御負傷だ、お怪我は何處だ、綱帯は何うだ」とガヤ／＼と騒ぐのを、水谷少佐は負傷ながらも手を振つて、ソレには及ばんと云ふ様な手付きをされる、ソレで小野寺小隊長が大隊長代理となり、林中尉が中隊長代理となつて指揮を取られ、水谷大隊長は其の儘擔架に乗せられて、後方に引取

られました、併し此の時幸ひなどは、敵は一ヶ大隊十八門位ひ

であつたので、余程立派な機械ではあるが、此方に三十六門で砲数は沈黙して仕舞つた、全体敵の砲兵は敵ながら威心なもの、敵は沈黙して仕舞つた、穴を掘つて隠れて居る様などは致しません、で、砲車の附近に穴を掘つて隠れて居る様などは致しません、自然の勢ひで御座います、夫れで大砲は立派な機械ではあるが、一時以上砲撃の爲め沈黙して仕舞ひました、箇様に申します、と何でも敵の方が豪傑で、味方の兵は臆病の様に思はれては困るが、日本の方でも砲兵が砲車の下に穴を掘ると云ふとは、以前は無かったのであつたか、段々と戦術の進むに随ひ、無暗に砲の傍に立つて居て、敵の的になつて打殺されるは能でない、否、能で無いのみならず愚の極だ、ソンのとで打殺されるは野猪の男で、決して忠勇なる人のする所で無い、犬死をするのは武人の

の耻辱である云ふので、砲車の横に穴を掘つて退入つて居る次第です、是れは飛んだ餘計なお話し、扱て此の敵砲の沈黙と同時に、歩兵の受持ちになりませんが、第三聯隊長牛島大佐は、中村少將指揮の下に立つて、直ちに前進を始められました、ソ、此の時味方の砲兵は、モ一敵砲は沈黙する、ナ、是からが、歩兵援助の役目だと云ふので、其の方面に向つて打出したので、敵の歩兵も此の砲兵の援助に由つて、次第々々に色つき渡つた、ソレを見て取つたる中村少將は直ぐに多田副官を呼んで「オイ、多田副官、何うも敵の歩兵は我が砲撃の爲めに、動きかゝつた様見ゆるか何うで有ろう、御苦勞だが一寸見て来て貰ひたもの、だ、ハ、イ、畏まりました」と多田副官は弾丸を肩して進まれたが、果して旅團長の見込みの通り、敵は我が砲撃の爲めに非常に打

惱まされ、今や動搖を始め居る時であるから、直ぐに引かへして之を報告すると、中村旅團長閣下は多田副官に命じて、我歩兵の前進を命ぜられましたから、直ちに第一戦より第二戦に移り、モ一充分敵に近付いたので、ドシ／＼之に向つて打始めました、彼は是する内に第二聯隊長渡邊大佐の卒ひた幾分も、同時に前進して参ります、敵は左までの大勢でないから、ソロソロ退却の模様が見へる、サ一此處だと云ふので第一聯隊と第十五聯隊は松村旅團長指揮の下にくり出し、師團の豫備隊等を除く外は、大概總がよりの有様であつたが、其の内、我味方の内、大分死傷者も出来ませんが、何分一ヶ師團に近い味方の兵力、夫れに加ふるに砲兵は沈黙したので、敵は愈々溜らなくなつたと見へ、遂に支へ切れずして、金州半島の地頭と頼む十三里台も其の儘打捨て、金州及び南山をさして引揚げましたから、僅

かの間の戦ひに全く第一師團の占領に歸しました、此の戦争が了へない内に、伏見宮師團長殿下には、始終戦況を御視察あらせられましたが、最初は非常に弾丸が飛んで来るので、幕僚の將校方は大に心配し、此處は危険なれば別所にお出でを願ふと幾度も申上げましたが、師團長殿下には少しも御開入れなく、戦争に來て危険を避けよと云ふとあるか、左様な心配は無用に致せと仰せられ、雲井に近き師團長殿下が、自若としてイツかな働き玉はぬので、將校は素より部下の士卒までも、此の御模様に拜し奉つり、又は傳へ承はりし者、何れも感激せざる者も無く、士氣日頃十倍して奮撃突戦、さしも堅固なる十三里台を占領致しましたのは、是れ偏へに殿下御威力の致す所と考へられます、箇様に戰場近くお進みになつて居られたので、水谷大隊長が擔架に乗つて來るのを、殿下は目敏くも之を見付

け玉ひ「三原々々、アノ向ふから来る擔架は將校の様じやが誰
 れだ、一寸見て参れ」どの御錠で御座いますから、三原少佐は
 「ハイ長まりました」とトツ／＼と、擔架の傍へと駆けて
 参られ、能く見ると水谷砲兵少佐だから「ヤ、是れは砲兵大隊
 長では無いか、オイ看護卒、水谷の容体は何うだ、餘程重傷の
 様見受けらるゝが……」ハイ餘程の重傷で、モ一人事不省で御座
 います「ム、夫れは氣の毒千萬、一寸其處に侍つて居て呉れ」
 と三原少佐は其儘其處を駈出して、元の所に立歸り「殿下あれ
 は砲兵大隊長水谷少佐で御座います」「ナニ水谷少佐か、負傷は
 何うじやの」「ハイ餘程の重傷らしう御座います」「オ、夫れは氣
 の毒じや、併し戦死は軍人の名譽じや」と仰せられつゝ、玉歩
 を擔架の傍に運ばれまして「オ、水谷か、負傷は何じやの……」
 と仰せになつたが、間もなく戦死される程の重傷だから、此の

難有き御言葉も、頓斗分らない有様であるから、三原少佐は水
 谷少佐の耳に口を當て「オ、水谷君……水谷大隊長……君の負傷
 を御聞きになつて、師團長殿下が御出でになつたのだ、君々確
 かりし玉へ、此處は殿下の御前であるぞ、水谷大隊長……水谷君
 ……」と呼んだ聲が耳に這入つたのか、未だ其の時までは玉の
 緒の、絶へなんとして一縷の望みある時であつたから、僅かに
 目を開いて殿下を見るより、恐懼の餘り驚いて跳ね起さんとする
 るを、殿下には右手を振つて之を制し玉ひ「モ、起るには及ば
 ん、其の容体で起るのは宜しくない、負傷は左程でも無い様じ
 や、氣を落さず養生を致せ」と世に難有き御言葉に、鬼を救く
 水谷少佐も、勿体なさ難有さに、流るゝ涙は瀧の如く、叶は
 ぬ乍ら右手を上げ、寂ながら敬禮致されまする、傍へに居合す
 人々も、其の心情を思ひやり、思はず袂をしぼられたが、惜し

いとには水谷少佐、トール病院で死亡致されました、箇様な都合で十三里盞は、我軍の占領に歸しました、此の日の戦闘は第一師團の死傷者は、都合百四十六名御座いました、其の内將校の死傷者は左の通り

重傷者 水谷砲兵少佐 (入院後死亡) 小木谷歩兵大尉

輕傷者

板倉砲兵中尉 高梨歩兵大尉 森下砲兵大尉
菊池砲兵中尉 飯野歩兵少尉 島田砲兵少尉
小關歩兵少尉

之を御覽になつても、砲兵聯隊が如何に苦戦奮闘したと云ふことが分りませう、敵の兵數は占領後砲兵丈けは砲八門と云ふことが分つたが、歩兵の方は詳細に分りません、戰場に棄てらあつた敵の屍體は、將校以下三十名、捕虜は將校以下六名でありました

たが、捕虜の言に由りますと、敵の死傷者は約三百と云ふので御座いました、サー夫から愈々金州城の攻撃をや、ソして南山を取らねばならぬとになりましたが、兎角此の金州城を取らんと云ふと、南山に掛る譯に参りませんが、ソレで金州を攻め南山を取ると就ては、陸軍のみでは何うも具合が悪い、是れは是非海軍と協力せないと難かしい、夫れと云ふのは御承知の通り金州海と大連海とで、金州は挟まれて居る様な地形であるから實は艦隊に向つて艦の援助を請ふ筈であつたが、何分早く大連を取らないと、我軍隊が種々の材料を集むるのに、非常の不便を感ずるから、兎角艦隊を構はず、金州南山附近に在る兵を一先づ打拂ふと云ふとに決し、軍司令官から左の通りな作戰計畫を致されました

(一) 第一師團、第三師團若干欠、第四師團の殆んど全部、野戦砲

兵第一旅團、工兵第五大隊を以て敵を攻撃し、残餘の一部を以て普蘭店、大沙河の點に在りて北方に對し、軍の背後を掩護せしむ。

(二) 軍の主力は五月廿三日十三里臺より大窪口西北岸に集合し

廿四日拂曉前より運動を起し、第四師團は復州街道方面より、第一師團は其の左りに連係して大和尚山西側の地區より、第三師團は其の南方の地區より互に連係して前進し、尙

り、金山より金州の東方約一里半に在る高地線を占領し、砲兵旅團は右各師團に伴ひて前進し、先づ金州城内を砲撃せしむ。

(三) 廿五日各隊は攻撃準備並びに糧食彈藥を第一線に集積し、了

らしむ。

(四) 廿六日拂曉全砲兵は陣地を敷き、天明と共に南山に向つて砲

撃を開始し、次で攻撃を實施せんとす。

先づ筒様なもので御座いました。

第五回

ソコで第二軍の各師團乃ち第一、第三、第四、此の三師團は十三里臺を占領された後は、其の十三里臺の高地點に互りて、凡

てか其處へ陣地を占領し、金州半島の地頭を扼して、夫から引

續いて其の前に在る敵情は如何と云ふ、其の偵察と云ふとが第

一ゆへ、夫れから或は將校、又は下士等か手を分けて偵察を始

められました、前段申上げました通り、廿一日に奧司令官閣下

より、作戰計畫に基く前進の命令が出たので、廿二日から廿三

日にかけて、凡てが行軍を始めました、其の行軍に付ても道路

の悪い爲め、非常の困難でありましたが、廿六日には南山に向

つて攻撃を開始すると云ふとゆへ、何んな惡道でも何んな困難

でも、是非目的の場所まで行かんければなりません。就中各砲兵が一番の困難で御座いましたが、併し百難を排してドン、進んで居られます。其の内に廿二日も過ぎて廿三日となる。此の廿三日には軍の参謀官を所々方々へ出されまして、敵情偵察と云ふとに取掛られたが、此の時は幸ひにして、参謀官にも敵に覺られなかつた爲め、誰れ一人微傷を受けた者も無く、各充分に敵状を視察する事が出来ましたが、其の敵情を偵察された結果と云ふのが、乃ち左の通りで御座います。

一、和尙島には重砲八門、柳樹屯には大倉庫あり
 一、南關嶺の東方高地に散兵濠あり九里店南方には若干の歩兵あり
 一、南山には砲臺約八座、堡壘三、其他散兵濠あり又た其の絶頂には探海燈あり而して備砲には二十瑠知、十五瑠知、十

瑠知半、八瑠知、六瑠知、七瑠知の六門の加農砲及び速射砲あり又た其の東麓には一面に鐵條網あり

一、金州には依然歩砲兵若干あり

先づ箇様なもので、尙ほ其他にも偵察の結果は、軍司令官にはお分りになつて居りませうか、私のお話しはホンの大要で御座いますから、此段は一すお断り申して置きます、是れは廿三日のとであります。此段は、明くれば五月廿四日となり、モ一廿四日となり、南山攻撃の前日であるから、萬事萬端軍司令官は申すまでも無く、各師團も實に忙しむであります。此の日の午前十時頃、我海軍の聯合艦隊参謀長島村大佐からして、軍司令部に宛て一通のお手紙が参りました、イヤお手紙では無い通報で御座います、ソレは如何なるものであるかと云へば、大要先づ左の通りの文面で御座います

聯合艦隊は第二軍の攻略作戦に策應する爲め筑紫、平遠、赤城、鳥海の四砲艦及び第一水雷艇隊を金州灣に分派し廿五日は蘇家屯高地の敵壘を砲撃し廿六日も早朝より同一の敵壘を砲撃せしむ

但軍の砲撃止むか日章旗を見る時は蘇家屯砲撃を止め西方海岸を砲撃して敵を西方に牽制せしむ

尙ほ廿四日以後霧又は荒天の時は取止む

先づこんな様な次第で、第二軍參謀長落合少將は、此の通報を一通御覽になつて、夫から軍司令官奥大將閣下に差出されました、奥大將は御熱覽の上落合少將に向ひ「サ、是れは成程宜い都合になつて来た、砲艦でも四隻も援助攻撃をして呉るれば我陸軍に取つては餘程の便利、イヤ便利所じや無い大なる助けであるが、併し此の末文の霧又は荒天の時は取止むとあるは困

るな、丁度今頃はモ、此邊一帶霧のかゝる時期になつて居るか、此奴は當てにならぬワ、イ、如何にも閣下御言葉の通り、艦の来るのを當てにするとは出来ませんが、海軍の方で何の故障も無く、廿六日の間にさへ合ふて呉るれば、此の上も無い幸福で御座います、併し全く艦隊の援助と云ふとは無いつもりと云ふのが、一番安全で宜しう御座いませう」と云ふ様な次第で奥司令官も落合參謀長も、此の軍艦が廻つて来て呉るれば尙ほ宜い、併し全く當てにはせんと云ふとを、此の時已に御決心があつたらしう御座います、が聽て廿四日の日は各師團長、夫に續いて各砲兵聯隊長を軍司令部に召集され、段々と軍議を凝らされました、其の會議と申すは言ふまでも無く金州を先づ取つて夫から南山に向つて攻撃を開始しよう云ふので、其の事を會議に附せられたが、兎に角第一番は砲兵の力から無いと、南山

を占領するとは出来ませんから、師團長に次で各砲兵隊長も此の會議に召集されたものと思はれます、素より此の會議の時は随分種々な議論もあり、諸將軍からも銘々の意見を吐かれまして、是等は最も軍機の秘密であれば我々の視ひ知る所では御座いませぬ、去れど愈々會議の末攻撃計畫と云ふものを、各師團に與へられました、攻撃命令と云ふものが出ました、モ一此の時は廿四日の午後になつて居て、各隊は前進を了へて開進し、其の線に於て攻撃準備は已に出来上つて居ります、其の攻撃命令と申しまするは

第一期 第一師團に關する命令の要旨

第一期 第一師團は夜暗に乗じ運動を起し一小部隊をして復州街道以東入里店の線以西の地區を前進し明廿五日午前三時卅分

と期し金州東北方高地附近に亘る線を占領せしめ主力は南山に在る敵の砲火の害を被らざる地點に位置し前進の準備に在り、但其砲兵の一部は午前三時半までに南山に在る砲火の害を被らざる地點に於て金州城を射撃し得る如く陣地を占領す

第二期 第一期の姿勢に在りて艦隊の砲撃を待つ

第三期 第一師團は金州城東側と南山東北端との線以東、南部入里庄、閻家屯中央の線以西の地區より南山に向つて攻撃前進す

此の外第三、第四の兩師團に下された命令も御座いますが、先づ此の命令に類似したもので、一々攻撃命令の如きものをお話

しすれば、大分話しが長ふなつて、軍人以外のお方には却つて御退屈、イヤお不分明で面白味が無いと申さるゝは必定、ソコで此のお話しは此位ひで略して置きます、併しお不分明なぞも申すと、一寸お客を見くびつた様に聞へますが、全体私しの主として戦争談を致しますとお客様と云ふは、新聞など御覽になる暇の無い婦女子のお方に、可成分る様に戦争談をして聞かして軍事思想を確かり吹込みたい考へで、思ひ立つた講談でありますから、其の邊は悪しからず御叱りを願ひ置きます扱て此の攻撃命令が出ました其時は、モ一各師團長や旅團長聯隊長方も御退散の後で御座いましたが、廿四日も巳に暮れんと致しますので、急ぎますのは砲兵で御座います、御存の通り歩兵ならば何時でも大概な所に行かれますが、砲兵はソコに急に進まるゝものではありません、ソコで砲兵聯隊長は軍議が了

ると直ぐに本部に歸り、夫れから行軍、イヤ行軍では無い乃ち前進して陣地進入をやるので御座います、然るに砲兵も第一野戦砲兵、第三野戦砲兵、第四野戦砲兵と、各聯隊が来て居ります、此の外に砲兵旅團の方からも、別に軍司令部に附て居ります、夫れは第十四、第十五、第十三と云ふ三ヶ聯隊で、ソコで大砲の数は總計百九十八門で御座います、夫れが南山へ皆向ふのであるから、一ト通りの困難では御座いません、併し此の廿四日に進まれるのは、南山に向つて直ぐ進まれるでは無く、金州の方から先づ一番に攻め取らんければ、南山に向ふとは出来ません、ソコで先づ金州を取りて南山に向ふのであるから廿四日の夜からズン、進んで、或る一部の隊は廿五日中には、是非金州を攻取つて仕舞ふと云ふ計畫で御座いました、此の砲兵内にも或る一部は、金州に向け砲撃するとなつて居まし

たが、野戰砲兵第十三聯隊は、特に軍司令部から命令があつて第四師團に配属するとに相成りました、ソコで此の砲兵聯隊長佐野中佐は、其の命令に接して直ぐに第四師團長小川中將閣下の許に参らされたが、小川中將閣下の方には、野戰砲兵第四聯隊長福永大佐と云ふ方が居られます、此の福永大佐と云ふ方は、其の時分にはモ一古參大佐で、長らく大阪の砲兵聯隊に居られた人であるが、此の時福永大佐が古參ではあり、而かも最初から第四師團附であるから、十三聯隊長の佐野中佐は未だ中佐聯隊長でもあり、聯隊長の職を奉せられてから、未だソ一長くはありませぬ次第で、ソコで萬事のは福永大佐に打合せ、福永大佐の指揮を受けよう云ふ佐野中佐の抜目の無いお考へで、萬事福永大佐に分り切つたとまでも相談して居られましたので、非常の好結果を得たと承はつて居ります、尙ほ餘

計な話してはあつたが、此の福永大佐の事を一寸一口お話を致します、此の福永聯隊長の御出身は鹿兒島の御出身で、人並に格の上、一寸見ると驚くべき顔付であるけれども、全體が餘程洒落な方で、軍隊のとり取つては非常なる熱心で、何につけ彼につけ、軍事教育に付ては親食を忘るゝと云ふ御熱心ソレでこそ我々の様な者にも屢々御依頼があつて、福永大佐の聯隊には幾度も出て講談を致したとが御座います、若し大阪で一寸でも途中に出逢ひますと、オイ君は何日來たか、此の大阪に來たら來たと云ふことを知らせて呉れても宜いでは無いか、モ一ちらりとでも見た以上は、決して見逃すとは出來ん、サ一今から來るか明日來るか云ふて、福永大佐どのに出逢つたら、毎つも其の聯隊に引張り出されないと御座いませぬ、ソレで私の無調法なる講談を兵士に聞かせて、軍隊教育の補ひにしよ

うと云ふ人で、福永大佐どのには實に私の知己であると密かに喜んで居ります次第です

第六 画

引續いて砲兵中佐佐野勝次郎君のとも一寸お話し申したいが、餘り話しが續けば退屈であるから後廻しとして、是れから直ぐに戦争の話しに取かゝります、南山を攻撃するには先づ金州を攻撃して、其の後でなければ出来ないと云ふとは、前回にも述べました通りで御座います、ソコで先づ廿五日に金州を攻むると云ふ事に定まり、各砲兵は金州附近の高地から、金州城を目かけ砲撃するの準備に取かゝりました、尤も是れは廿四日の夜から、其の準備に取かゝつては居りますが、金州附近の高地には適當なる砲兵陣地が御座いません、イエ全く無いと云ふ譯で

はないが、距離が非常に遠くなります、遠くなるからと云ふて進み過ぎますと、金州を砲撃するに極具合が悪いと云ふので、砲兵隊では余程の困難で御座いました、全体露國の砲と云ふものは、普通の野砲にしても、余程日本のものより大きいから、随つて距離も遠く打てます、併し日本の野砲は露國の野砲に比べて、どうでも半里以上距離が近くないと、敵陣地には届きませんから、日本の砲と露國の砲とを比べれば、露國の方が強ふして遠くに利きます、筒様に申すとソコなら日本は早く野砲を大きくして、露國に負けん様な大砲を拵らへそうなものだと言はれるかも知れませんが、ソレは日本の方でも、今日の所では一寸出来ないと話して、夫れは何故かと申しますと、露國の大砲の様に砲身を長く大きくすれば、随つて砲車も大きくせねばなりません、砲車を露國の様に大きくすれば、日本では道路

から改修せねば、現在の四間巾とか六間巾と云ふ田舎道では、
 迎も動かすことが出来ません、ソレが爲め日本の大砲は砲身を小
 さうしてある次第です、併し陸軍部内でも、コレ位ひなれば勝
 たれんとは無いと云ふは、獨り私の考へ計りでもありますまい
 野砲の話は先づ是位ひに致して置いて、目ざす所の金州城で
 はソノ多数の露兵が這入つて居ないとは、略ぼ分つて参りまし
 た、且つ又た金州城の模様を見ても、ソノ多数の兵が入る所で
 は無いから、第一師團の二ヶ旅團を以て攻めたなら、譯も無く
 取らるゝであらう、併し第四師團と第一師團とで之を攻むると
 となつて、愈々廿五日の夜各隊は幸ひ闇夜であるから、之に乗
 じて運動を始めるとになりましたが、丁度廿五日の夜十一時頃
 から、非常な大風雨、ソレに持つて行つて雷鳴がする、稲光り
 がすると云ふ、所謂咫尺も辨せずと云ふ様な、物凄さ光景で御

座いました、是れが爲め我軍には益々困難を致されましたが、
 又た一方には此の暗いが爲めに、多少日本軍の前進に便利を與
 へたところで御座います、全体此の金州城の附近は、海岸を沿
 の外に一般に中高い土地で、夫々に低い土地がチヨホク入
 交りになつて居るから、前進をして散兵する爲めには多少の便
 利は得ますもの、其の夜敵は始終光弾と申して、暗夜に煙火
 の探りなものを打揚げ、月夜の如く四邊を照して、我が運動を見
 ん、居りますから、いくらか暗夜だからと少しも油断は出来ませ
 ん、打出します、此の時日本の砲兵は、諸方面から金州城に向つ
 て砲撃を始めました、宜い陣地を見付けられたので、ソノから
 聯隊と十三聯隊とは、此の二ヶ聯隊の砲撃には随分敵
 して非常に砲弾を送つたから、此の二ヶ聯隊の砲撃には随分敵

も弱つたらしう御座います、ソコで砲兵の話しを一す一ヶ聯隊の行動丈けを申し上げます、野戦砲兵第十三聯隊長は前述へました通り佐野中佐で、其の第一大隊長が古賀少佐、第二大隊長が秋本少佐、第一中隊長が鹽島大尉、第二中隊長が窪田大尉、第三中隊長が小林大尉、第四中隊長が今川大尉、第五中隊長が安部大尉、第六中隊長が宮地大尉で御座います、ソコで此の砲兵は五月廿五日の拂曉から、金州城に向つて攻撃を始めると、敵隊も随分敵弾の来るは来るもの、最初申上げた通り餘程遠距離であるから、味方の弾丸も届かぬ代りに、敵弾もソ一餘計には参りません、日本の砲兵陣地に向つて敵が大砲を打かけるのは、矢張南山附近の敵の砲臺から打つたので、全体南山は金州半島の咽喉を扼し、金州一帯の平地を見下す、快濶遠大なる射

界を有する所である、加之ならず南關嶺の高地も距離は少し遠いが、之も諸方に向つて打てる様、一寸砲臺向きに拵らへ、此處にも大口徑の巨砲を備へて居つて、其處此處の陣地から味方が一響能く敵の爲め打てる所であるから、割合に佐野中佐の方へ澤山に敵弾が参ります、併し宜い鹽梅に佐野中佐が地形を利用して砲を敷かれたから、死傷者は格別無かつたので、其の地形の略圖を一寸書きたいが、地形の略圖を書けば皆な書かねばならぬから略します、併し何んな地形に大砲を据付たかと申しますと、手前が低く先きの方も亦た低い、其のほとんど絶頂の所から少し下つて、砲身の口が絶頂に現はるゝ丈けの様にして打出されました、夫れが爲め敵弾が前に来て當れば、弾丸は其の當つた所から斜に外れて、遙か後ろの方に落下します、其の

山の頂上を打ち越したのは、無論後ろの方に行きますから一向に當りません。ソコで佐野中佐は馬匹や彈藥車等を其の山の真下に引つけて、敵に見へぬ様にして打たれたから、敵はいくら打つても効が無いから非常に困つた。佐野中佐は副官と共に陣地の右に當る高地に上り、望遠鏡で敵地の模様を見て居られるが、何うも此處から見ると非常に能く見へます。「ムー今の一發は能く行つた、イヤこいつは甘いぞ」とお二人で頻りに見て居られると、秋本少佐が飛んで來られて「聯隊長殿其處は非常に危険な所です、此方から見へます代りに、彼方からも能く見へます、サー、早く其處をお退きなさい」と注意を致されました。元來佐野中佐と云ふお方は、戦争には是まで縁の無い方であつたから、其の戦争が見たくて、溜らんから、副官と見に出掛けられたので、併し周到綿密で一寸の抜目も無い、流石に

聯隊長であるから「サー、僕等二人が居る位ひなのに、敵も貴重な彈丸を送ることもあるまい」と申される。秋本少佐は戦争には大分経験のある人だから「イヤそれはいけません、其處にソ一して立つて眼鏡を手にして居られると、一軍の指揮官と云ふとは直ぐ敵にも覺られます、早うお退きなさい」と云ひ乍ら去つた跡に、佐野中佐どのも仕方が無く、ソンなら此處を去らうと云ふので、二三歩下りかけられると思ふと、ドーンと一發打かけました。佐野中佐は「オイ副官、是れは大變だ、今また大隊長が言つた舌の根の乾かぬ内にモ一是れた、イヤもう危険々々」と急いで逃げ下られると、又一發最初聯隊長の立つて居られる所へ真正面に來て破烈を致した、若し聯隊長等が今一步逃げ様が遅かつたものなら、如何なる危険に遭遇せられたか分りません、佐野聯隊長は此の有様を御覽になつて「副官々々

成程秋本は經驗があるわい、大隊長が言ふた通り少しも違
 ひは無、若し今少し逃げ様が遅かつたら、夫れこそお陀佛と
 化する所であつた、如何にも仰せの通り實に危険千萬でした、
 若しも聯隊長殿に萬一などがあつては行けません、早く何處か
 へ参りませう」と話しながらヤツて來られる所へ主計の一人が
 夫れへ出しまして「副官どの始まりましたな、何うです少しは見
 へますか「オイ、君は非戦闘員では無いか、斯んな危ない所
 へ來るものでは無、今も敵弾が二つ落下した位ひだ「へー
 左様ですか、併し此處は陣地では無、一寸覗みた位ひは
 宜いでせう「どうして、中々危険だ、コレ、そんな所へ出
 てはいかんど、頻りに注意して居られる口の下に、一發ドーン
 とやつて來たのが、生憎と此の主計の方の傍に落ちたから溜ら
 ない、はずみを食つて打倒されましたが、幸ひに至つて微傷で

仕合せであつた、此の不意の出來事に驚いた主計の方は、驚く
 の驚かんのでは無、コリヤ溜らんと引下つて來ると、副官は
 可笑しくもあり氣の毒にもあり「どうだ砲彈の味は又た格別で
 あらう、僕が危険だ、とアレ程注意したのに、聞入れんから
 其の通りだ、サ、早く後へ」と共に後方に退かれました、
 其の内味方からは容赦なくドン、叩付ける、敵も去る者味方
 の砲が分らんから例の風船を上げ始めた「ヤ、何だ、ハ、
 一輕氣球だ、アレを一つ打落してやりたいが、ソリヤ又た一
 つ上つた、彼奴らひとを遣り居るな、今度のやつは丁度紙鳶
 の様な形だ」と云つて居ると、其の風船が段々と高く上つて、
 丁度味方の陣地の上に飛んで來て、頻りに我陣地を見下して居
 たが、繼て何かの信號を爲したかと思ふと同時に、一二發の敵
 彈空を切つて飛び來るや否、谷影に在る彈藥車や馬匹に損害を

與へたから「イヤ憎い奴、此の彈藥庫と馬匹を目かけて打出した、早く」と云ふ聯隊長の命令で、右の方の谷影へ彈藥車と馬匹を移されたから、其の後は風船から見ても分らないから、トー、輕氣球を上げるのは止めて仕舞つた。併し餘り激しく敵彈が来るから、小川第四師團長も大層心配せられて「砲兵の十三十四兩聯隊は、余程の死傷者が出来たと思ふて居られ、摸樣だから、佐野聯隊長は直ちに一人の下士を出して師團長に報告された、其の報告に由れば敵の砲彈の爲め、味方には二名の微傷者と、馬匹に少しの損害があつただけ、死傷者は先づ無い方であるとのとであつたから、小川師團長閣下も暫らくは驚きの目を見張つて居られたが「何んだ此の報告は、まるで己れの考へと反對だ、アノ有様で死傷の無いと云ふは如何にも不思議だ、是れは實際の事か」と申されたとは左もあるべきと

で、實に砲撃の割合に死傷者の無かつたのは、佐野聯隊長が處置の宜しきが爲めで御座います、ソレで此の日砲兵の働らきは先づ十三聯隊の力ら與へて多きに居ると申しても宜しい位ひです、其の他砲兵隊のお話しは、何れも大同小異であるから此處には略致します、箇様の都合で其の夜の中に金州を取らうと云ふ計畫で、第一第四兩師團の前進を始められました、此の時分に佐野聯隊長は、モ一金州は取れて仕舞ふたものと思ふて、馬から金州城へ行つて見られたが、未だ金州へ行付かん内に、敵の歩兵からバラ、ツと小銃を打出されました、サ、もう金州は取れて居るつもりか取れて居ない、お負けに佐野中佐の通られた道は、左右とも士手の高い掘切り道を、風雨を冒して進まれたのであるから、此の小銃の射撃に遭ふて、俄かに退却しようとして、餘程の困難である、其の内に敵は猶豫なくドン

ドン打出したから「コリヤア溜らん、金州は未だ取れては居ないのだ、サー後へ」と俄かに退却を始められると、確れか一人馬から落ちた者がある「ヤツ誰れかやられた様だが、此の模様では迎も助くる譯には行かん、一先づ退却々々」と云ふので、大急ぎで陣地へ引揚げられたが、其の内に其人が歸つて来た、夫れは馬がすべつて落馬した爲めで、銃丸に當つたのでは無かつたが、佐野隊長以下何れもビショ濡れになつて、馬も毛色の分らん位ひ泥だらけ、夫れでも無事に退却されたのは仕合せで御座いました

彼は是する内二十六日の午前近くなつたから、歩兵第一旅團を右翼に、乃ち松村少將指揮の下に前進せしめ、第二旅團は左翼として、中村少將指揮の下に前進せしめられました所が敵は金州城に近づくと同時に非常に打出した、是れは露兵が無茶なや

り方の様だが、暗夜ではあり照準が立たん、ソレで上下左右と探り打ちをやるから、所謂盲ら滅法界で非常な勢ひで御座います、併し我兵は此の金州城を占領せんければ止まぬ決心であるから、何處にも彼處にも「前へ前へ」と進まれます、此の時工兵少尉鳥谷君以下八名、此の人々が先づ金州城の東の門、乃ち春和門と云ふ所を打毀すと云ふことになつて居ります、鳥谷君は其附近に来ると「オイ、大分近付いて来たが、爆薬は持つて来たのか」「ハイ持つて参りました」此の時此の工兵に随ふて参りましたのが第一聯隊の第二大隊(三中隊欠ぐ)乃ち四百餘名の歩兵です、ソレで鳥谷工兵少尉は「ム、宜し、爆薬も来る、夫れに歩兵も来たら直ぐ取掛ろう、我々は此の門さへ破つて仕舞へば、夫れで責務は了るからネ」と云つゝ部下に命じて、持つて来た黄色火薬を、其の東門に打つけて置いて、夫れ

から針がねを引張つて電氣をヤル様に仕掛が済んだ、其の準備が出来ると同時に鳥谷少尉が「爆発……」と呼ばれる其の言葉の未だ了らざるに電氣が通じたから、ドーンと一聲素暗しい音響と共に毀れて仕舞つた「サー今度は中門だ」と云ふので、其の東門の毀れた内をドン／＼中門に向はれると、敵は狼狽しながら茲を先途と打出したが格別の死傷も無く、工兵の方々は又もや難なく中門を打破つて仕舞はれました、敵は二ヶ所の門を破られたから、モ一金州城内に足を止むるとは出来な、其の内歩兵第一聯隊の一部は、金州城の東壁に沿ふて、フーッとして上がったかと思ふと、バラ／＼と打ち出した、フーッで敵は一溜りもせず、ドーン／＼南山の方向さして逃出しましたか、サー今だと云ふので頻りに追撃を始められた、此の時はモ午前五時頃であつたが、歩兵第一聯隊の一部が追撃を始め

られると、敵はドン／＼逃れる、僅か一聯隊の一部が侵入したのに、直ぐ敵兵が逃げ出すと云ふのは、餘り容易の様ではあるが、是れは無理も無いと、金州城に居つた露兵は三百計りであつたらしい、ソコで五百足らずの兵でも、門が破れたから直ぐ占領が出来たが、其の時は丁度午前五時二十分であつたと申します、之に由つて第一旅團は六時頃にはモ一期の戦線に達し、第二旅團は拂曉から豫定の線を占領しました、箇様な都合で實際は第一師團の全部かゝつたのでは無く、僅かに第一聯隊の二ヶ中隊で占領したと云ふても差支へが無い位ひ、ソレで第四師團の歩兵は一すも手を出さずに占領されました、ソレで廿六日南山を攻撃すると云ふと、夜の内にから手配が極つてお話しに移ります、是から各砲兵聯隊の攻撃より、有名なる南山攻撃の

第七回

南山攻撃は五月廿六日、御座いましたが、其の實は廿五日から取掛つて居ると云ふても差支へは無い、夫れは金州を廿五日に攻落して、夫から廿六日の拂曉から南山に向ふと云ふことになつて居ります、併し前述へました通り、廿五日は夕刻から風雨迅雷の爲めに、思ふ様な働らきが出来ませんので、ソレで廿六日の拂曉から金州城を略取し、夫から南山に向ふたので御座います、此の時の各師團の配置と云ふものは、圖面が無くては一寸分り悪いが、敵に對して向つたのは第四師團が右翼で、第一師團は中央、左翼が第三師團の第五旅團と歩兵第十八聯隊、第一師ありました、今一つの歩兵第三十四聯隊は、矢張り第十八聯隊と共に第十七旅團となつて居りますが、此の三十四聯隊はズツ

と初め申上げた通り、他の方面を警戒して居りますから、此の戦ひには參與致されませんが、ソレで第三師團は第五旅團長山口少將の引居れる第六聯隊長南部大佐と第三十三聯隊長藤本大佐、夫れに第十七旅團の第十八聯隊長石原大佐のみ、是れが乃ち左翼となつて居られます、第一師團長、第四師團長及び各旅團長、聯隊長方は、最初に記して置きましたから、引合せ御覽を願ひます、然るに此の前に砲兵のお話しを今少し申上げたいたは、其の時砲兵は如何なる配置であつたかと申しますと、南山に向つて一番右翼の端が野戦砲兵第十三聯隊、其の次が同じく第四聯隊、其の次が同じく第一聯隊、夫から引續いて同十四聯隊、其の次が同十五聯隊で、ソレして一番左翼に居るのが、野戦砲兵第三聯隊の一個大隊、乃ち十八門の大砲となつて居ります、ソレで砲敵が合せて百九十八門、是れが一同に拂曉から

鳴り出しましたから、イヤ何うも烈しいの烈しくないので無
い、所謂天柱も挫けると云ふ有様で、何とも形容の仕様が無い
位ひで御座います、夫れに敵の方は云へば、半永久的の堡壘に
五六十門の大砲を据付け、我に向つて劣らず戦戦を致しました
から、一時は全く戦線に在る砲兵は、取撃して一切話しも出来
ん位ひでありました、所ろが一番困られたのは、乃ち我軍の最
左翼に居られた砲兵第三聯隊の十八門で、ナゼ困られたかと申
しますと、其の砲兵の居る所からズツと左りの方に、一寸した
小さい高地が御座います、其の高地と云ふのが名は能く記憶致
しません、其の高地の方面に敵砲兵が居つたのか、最初は一寸
では無い、其の高地の方面に敵砲兵が居つたのか、最初は一寸
も打出しませんが、季家屯と云ふ所であつた、併し格別そう名高い所
うと云ふとは夢にも知らぬ、夫れは知らぬ筈で、他の方面から

は全力を注いで砲撃して居るに、其處からは未だ一發も打たな
いから、敵の居様と云ふとは少しも気が付きませんが、のみなら
す全く敵は居ないと思ふて居た所が、砲戦愈々烈しくなつて、
モ一追付け味方の砲兵の力らに由り、敵の砲は沈黙しようと思
ふ有様になつて来たから、各方面の砲兵は茲に「東進メー」と
云ふので、段々五百米突なり千米突なりを進まれます、ソ一
してどんぐり打つて居られた所が、意外にも其の向ふで左りの
何にも居ないと思ふて居た所から、突然一發ドーンと打ち出し
ました、ソコで皆んなは夫れに吃驚して「ヤ一是れはド一も意
外の所に敵が居たぞ、サ一油断はならんぞ」と云ふ内に敵の方
からは、打つた打たんのでは無い、非常の速度で其處から打出
しました、ソ一して砲數も約十五六門あるらしい、ソコで初め
て敵の遊動砲兵と云ふとが分つた、ソレと見るより我野戦砲兵

第三聯隊の一個大隊は、其の方面に向つて應射しようと思ふ手筈を致されたが、其處からは大分に距離が遠いから、味方の方から打てば敵には届かない、之に反して敵の弾丸はドン／＼やつて参ります。「ヤ、誰れがヤラれはせないか、ナニ微傷だ、ヤッ、又た誰かやられた」と其處にも此處にも死傷者が出来て、實に見る間に悲惨の状況になつて来たから、將校下士卒とも必死となつて、之をもち返へそうと力めらるゝが、扱て残念なとには弾丸が届かない、敵の弾丸が味方の陣地へはドン／＼やつて来るのに、日本の弾丸が届かんと云ふのは、前段お話し申上げた通りで御座います、ソレで仕方が無いから非常の苦戦をしなからも、大隊長は如何にも残念で溜らない。「假令全砲兵が斃れて仕舞つても構はん、弾丸の達するまでは是非とも前進せねばならん、前へ……前へ……」と云ふので砲兵は前進を始めました

其の内に敵弾は雨の様に飛んで来るから、戦死負傷者山を爲すと云ふ有様で、其處にもバツたり此處にもバツたり、算を亂して倒るゝにも構はず、ドン／＼豫定の所まで進むと、モ、此處からなら大丈夫だと云ふので、バツたり砲車を止めて例の通り「第一打ラー……第二打ラー……早く打ラー……」と云ふ號令で、一生懸命打立てられました、ソ、すると果して大隊長や中隊長の見込み通り、弾丸が甘く敵の陣地へ命中をするから「ヤ、うまい、うまい、愉快々々、萬ザライ……ア、是れでヤッ、と敵討が出来た」と一同非常に元氣を回復して、僅かに十五六發も打つたかと思ふ頃、敵はいつの間にか又た千米突計り退却を致しました、夫れが乃ち遊動砲兵で、進むも退くも自由に出来る様拵らへてあります、ソ、又た味方の方はモ、弾丸が届かなくなると思つたに、敵は又々非常の速度で打ちかけましたから溜らない、我砲兵

の方では餘程の死傷者が出来て、或る砲などは最早動かぬと云ふ都合になりました、ソレでもモ一少し進んで打てば、多少成功するか知れないが、モ一此處から先きは地形の具合で思ふ様に進まれません、ソレで愈々此の砲兵は非常の苦戦に陥りました、野戦砲兵第三聯隊の苦戦は、まだ、澤山ありますが、夫れは歩兵の戦ひの時に再びお話しを致します、乃ち一番右翼に廻ソコでお話しは轉じて野戦砲兵第十三聯隊、乃ち一番右翼に廻つた砲兵のお話しを致します、此の野戦砲兵第十三聯隊長佐野中佐の体格から云へば餘り大きい方では無い、申さば小柄の瘡地であるが、併し頭の宜いお方で且つ沈着な性質であるから、萬事にかけて抜目の無い方で、交際などは中々長けて居られます、ソレして其の小柄な男に似ず非常に豪膽な人で、此の南山攻撃の時には最初申上げた通り、第四師團附を命せられ

て居たので、小川中將閣下の指揮の下に付て一番右翼に大砲を据へ、其處から頻りに打立てられました、所が其の直ぐ左りの方に居られたのが、砲兵第四聯隊長福永大佐で御座います、佐野中佐は云は、野中佐は云は、野中佐は福永大佐に何事も相談して其日も勸らいて居られました、簡様な都合であつたので、福永大佐の居られる場所を、可成危険で無い所に移されて、佐野中佐が云は、敵の的になつた様な所に出られませんでした次第です、ソレで敵は第四聯隊よりも、此の第十三聯隊の方が能く見へるから、随つて弾丸も其の方面に充分送ります有様です、時に其時まで我聯合艦隊の島村參謀長からして、聯合艦隊より砲艦二三隻を出して、我陸軍の攻撃に應援をする、云ふ通牒があつたにも拘らず、其の派遣さるゝと云ふ砲艦は、廿五日までは待てと暮せと

参りません、ソレが爲め敵の方では只だ我が野戦砲兵の方面のみに向つて打かけますが、只今申上げました通り、十三聯隊が一番敵から見へて居りますから、割合に澤山弾丸が飛んで参ります、夫れで十三聯隊の方は有らん限りの速度を以て、敵に向つて打かけましたから、モ一弾丸が欠乏し、もう一つは、何した、大隊長は弾丸の欠乏が氣で氣で無いから「聯隊長殿、何うも些と弾丸が手薄うなりました、如何したもので御座います、せう」と尋ねられますと、佐野聯隊長は一寸ウナづいたのみ、「ナ一ニ構はん、有らん限り打て」と一向弾丸の欠乏には頓着の無い様子だから、各大隊長方は非常の御心配で御座います、ソレで佐野聯隊長は、直ぐに段列長山本中尉に向つて急使を立てられ、「貴官は至急に彈丸を送れ」と云ふ様な意味で申し送られました、所が此の山本中尉は戦争の場所から約一里

も後ろの方に居られますが、其處は儲か蘇家屯かと覺へて居りますが、其處へ十三聯隊の彈丸を大分集めて置かれました、何うして其處に彈丸を餘計に集められたかと申しますと、廿四日頃から砲兵の前進に付て、道路險惡の爲め何うしても彈丸車などか思ふ様に運ばれません、其の内右蘇家屯と申す所に倉庫があつたから、佐野中佐は戦争の場合彈丸欠乏の事を、始終考へて居られたから、前以て其處に集めて置かれたので、ソレで今ま使を出して山本段列長に、直ぐ彈丸を輸送せよと申し越されたので御座います、所が御承知の通り道路は險惡なり、迎も車などで持つて來ると云ふとは出来ません、實に是れは無理な注文で、其の無理な命令であるとは、佐野聯隊長も氣の付かないとは無いが、若し今ま彈丸が欠乏しては、折角奏功に近づきつゝある砲撃も、遂には不成功に了らねばならぬから、無

理とは知りつゝ命令を下されたので御座います、所ろが此の段
 列長山本中尉は其の命令に接するや、上官の命令は山よりも重
 し、上官の命令は乃ち畏れ多くも陛下の命令だ、假令如何様な
 ることがあらうとも、苟くも段列長の職務として弾薬を送らなけ
 ればならぬと、馬に曳かせてやるべき弾薬車を、或は二つなり
 三つなり擔いで持つて行くと言ふとを始め、ト、命令通り
 立派に弾薬を運び了りました、是等は實に段列長の働らきで
 實戦以上の功勞であると言ふとを承はりました、箇様な具合に
 立派に命令通り、弾薬を運んで仕舞ひましたから、佐野聯隊長
 も非常の御満足で、「モ、是れ丈けあれば安心だ、決して欠乏は
 せんから、サ、打て、」と打つて居られる内に、ド、インと
 一發飛んで来たのが、第四中隊のホンの真ん中に來て落下した
 からサ、溜らない、中隊長今川六藏君が戦死をされる、水戸中

尉は頭部を打たれて重傷、中隊付の木村曹長、特務曹長の木村
 某などは、全く身体は切れ、所謂肉は飛び血は波
 を爲すと云ふ様な光景で、此の一發の敵弾の爲め多数の死傷者
 が出來ました、此の時佐野聯隊長は、聯隊副官の波多規矩藏と
 云ふ人をお呼びになつて、「どうも實に悲惨だ、副官一寸あの四
 中隊の有様を見られ、我輩に是まで戦争に縁が遠くて、只だ
 戦争の悲惨などは新聞紙上で見る丈けであつたが、實に此の悲
 慘の状は新聞紙の形容詞其の儘だ、どうもそれ以上は筆にする
 文字が無い、ア、實にひどい、」と云つて居られる内に
 西島旅團長からして又た急使が參りました、其の急使の云ふ所
 に由りますと、歩兵の前進も砲兵が今少し進んで援助して貰は
 んでは逆も持て無い、實に絶体絶命の場合だから、是非十三聯
 隊の砲兵をモ、少し進まして、我が歩兵を悩ます所の敵砲兵を

撲滅して貰ひたいとの注文で御座いました、未だ此の時分は第七旅團乃ち西島少將の率ゆる歩兵も其の他の歩兵も、敵と戦闘を交へて居るのでは御座いません、或る方面まで前進して其處に展開して居る丈けのとであつたが、其の場所が丁度海邊であつて、後ろは全く海になつて居るし、前は一寸した山がありま

す、夫れを敵の方から見下げ打ちに打ちかゝるから、如何にも西島旅團長の居られる所は、頭から弾丸の雨を受けて、まだ戦はん前に大分の死傷が出来たから、夫れで右様な事を申送られ

たので御座います、佐野隊長は此の使の口上に接して「歩兵が一ヶ旅團も全滅と云ふことには由々しき大事である、ソ

云ふことなら如何なる困難を冒しても前進せねばならぬ、第一大隊前進……」と云ふので、古賀少佐の率ゆる十八門の野砲を前進すべしと命せられました、第二大隊の方は御承知の通り、今川

中隊長を始め多数の戦死負傷者が出来て、實に非常な悲惨を極めて居る最中であるから、第一大隊にのみ命せられた次第で御座います、然るに中々敵が烈しく打出して居るから、容易に前進する事が出来ません、けれども古賀少佐は命令を受けた以上我が大隊は途中で悉く斃れても構はない、前へ……前へ……と砲車を押出され、敵は益々瞰ひを定めて打出しますから溜りません、其の前進中にも段々と負傷者が出来、其の内、敵は其處にも破裂、此處にも破裂と云ふ有様、所が最初お話し致しました今川中隊長戦死の際飛んで来た敵弾が、味方の弾薬車に打ち込

み、夫れが爲め味方の弾薬車が破裂したのを、最初は何人も気が付かんであつたが、愈々弾薬が爆裂したと云ふと分り

後ろの方では非常な大騒ぎ、何さか之を消止むる工夫をせぬと

敵弾の落下よりも此の方が大變だから、サー早く此の火を打消

さんければならぬと云ふので、後ろに在る第二大隊の人々が、
 がよりになつて消さんと致しますが、何分弾薬車に打込んだ、
 夫れが破裂するのだから、何うして、中々近寄れる所の騒ぎ
 ではない、普通の人家の焼くのでさへ、風が吹出したが最期消
 防も寄付くとは出来ませんに、弾薬車の火災と来ては迎も迎
 も、最初から面てを向くとも出来ません、此の時十三聯隊の
 二等卒で飯島と云ふ男があつた、此の飯島と云ふ男は平生何
 役にも立たん、聯隊中では馬鹿者を以て稱せられた男である、
 此の時もボンヤリ其處に立つて居るから、「コラ馬鹿、貴様は何
 をボンヤリして居るのじや、此の弾薬車の火災が目に遣入らな
 いのか、如何に馬鹿でも程のあつたものじや、サ！あつちへ行
 け、消防の邪魔になる」と吐鳴り付くると、馬鹿先生は平
 氣なもので「ナニ此の火を消すと云ふのか、是れ位ひなどは譯

アない」と云ふかと思ふと、何處から持つて来たか水を持つて
 来て、其の弾薬車の破裂する傍へ何の恐るゝ所も無く持ち行き
 て、ザブザブ、其の水を掛けたから、暫時にして其の火を消止
 むるとが出来ました、佐野聯隊は之を見られて「ア、平時の大
 馬鹿は馬鹿では無い、實にどうも珍らしい豪傑だ、昔しか大
 勇の人は馬鹿の様だと聞いて居たが、之を見ると夫れ或ひは然
 らんかだハッハッ……」と打ち笑はれました、箇様な有様で後
 方は非常の困難であつたが、一方の古賀大隊に聯隊長の命令で
 あるから、夫れ等の難儀を後に見捨て、前進を致されます、是
 れから急々第一大隊の砲撃と云ふとに移ります

第八回

野戦砲兵第一大隊長古賀少佐は、命令の通り前進を始められま

したが、前にも述べました通り、此の邊一面は快調の地で、而かも敵の砲兵は疾くから實地演習で、距離を確かに測知して居るから、其の第一大隊の前進を見るや否や、打つの打たんので無い、つるべかけてドン、砲弾を送るから、實に大隊の危険は言ふ計りで無く常に危険と云ふ計りで無く、時々刻々に死傷者が出来る有様ではあります、古賀大隊長は委細構はず、ト「目的の場所まで前進致されしました、ソコで「ナイ宜しい止まれ」と云ふので砲車を止め、直ぐに味方も打ち方を始め、田、蓋島、小林の三大尉は必死となつて號令を下し、ズドンと打つて居られます、折しも敵の一弾第二中隊の附近に飛來して、其處で破裂を致したから測らない、田中隊長第一番に負傷し、其の他の二三名もバタ／＼と倒れました、夫れと見るとより数多の人々が「中隊長の御負傷では御座いませんか、

早く綱帯をして差上げい」と立ち騒ぐを田大尉は押し止めて「ナイ、僅かの負傷じや綱帯などはせんでも宜しい、夫れよりも砲撃は今が一大事の時期じや、己れに構はずナイ打て」と負傷ながら頻りに指揮を取つて居られます、然るに敵の砲兵は天險に加ふるに、有らん限りの人工を加へた要地に據るとなれば、日本の砲兵は何れも全力を注いで砲撃されるかなれども中々思ふ様に敵の堡壘を打撃することが出来ません、併し幸ひにして前夜の雨も、夜明け前から止んで霧も大分濃くはあるが、雖て天も明け立派な天気となつたから、味方の狙ひも正確になりました、何しろ味方の砲数は二百門近くである、假令思ふ様に敵壘を打撃することが出来るとは云ふものゝ、大分敵も弱つて来た模様が見へます、其の内に幸ひなには海軍の方からも、約束の通り軍艦がヤツて参りました、最初金州灣の方に當つて

水雷艇の様なものが見られ、夫れが砲兵隊の人々にも見へ、又
 た第四師團の歩兵の方からも見へますので、此の戦争の最中に
 も拘らず「アー大分あの船は近く見へる様になつたが、無論ア
 レは味方の砲艦に違ひない」「イヤ艦形が小さいから水雷艇だ、
 「イヤ水雷艇が何で此處に来るものか」「ナーニ水雷艇が偵察に
 でも来たのだらう」「馬鹿云へ水雷艇が何で晝の昼中来るものか
 ソーラ段々近付いて来るのを能く見玉へ、何うだ砲艦だらう、
 イヤ砲艦に違ひない」と噂さどりと、の所に、次第々々に
 近付いて参りましたのは、果して日本の砲艦が四隻、乃ち先き
 に聯合艦隊參謀長から申し送られた通りで、第一番に進航して
 来たのか赤城、其の後ろから鳥海、筑紫、平遠と云ふ順序で、
 外に水雷艇も二三隻は居つたらしう御座います、ソレを見付け
 た味方の砲兵及び歩兵の人々は「ソラ来た」日本艦隊だ

高知の通り此の赤城は日清戦争當時に、坂本八郎太君が少佐艦
 長で乗組まれ、黄海の海戦には僅か七百噸の小艦でありながら
 非常な働きをして敵味方の目を驚かし、遂に此の激戦中に阪
 本少佐は戦死を致されたと云ふ、實に名譽ある軍艦であるから
 誰あつて赤城を知らない人はありません位ひ、夫れであるから
 艦の近付くと同時に、或る一人が一番に赤城なるのを發見し、
 「ヤーあの四隻の内第一番は赤城だ」と云へば皆んな一同
 に「ソレだ赤城に違ひは無い、アレは實に名譽の軍艦じや、甘
 い」大分陸に近付いて来た、ソラもう打出す距離になつた、
 アー愉快、愈々是れで南山の敵も滅茶々々になるのだ」と
 我を忘れて其の方のみを皆な見て居られると、轟てドーンと一
 發煙りが上ると見る間に、ウナリを生じてヤツて来た一發が、

第四師團の進んで居られる前面の敵壘に落下して、非常の勢ひで破烈致しました、之を見たる各隊の將士が、皆な期せずして萬歳を呼びました、其の聲のまだ了らん内に又もや各艦より非常な勢ひで打出しました、ソコで砲兵も之に力を得て、海軍に負けるなど云ふ勢ひで、盛んに打立てられたので、サー敵は海陸挟み打ちとなつて来たから溜らない、其の砲撃も次第々々少なくなつて、遂には沈黙と云ふ姿に相成りました、丁度此の時は廿六日午前六時五十分から七時近い頃で御座いました、た

茲で一寸陸軍の話中で御座いますが、此の陸軍援助の爲め派遣せられたる海軍の話を御座います、此の南山攻撃に参加せられたる軍艦は、前申上ます通り都合四隻の砲艦で、水雷艦も四隻参りました、其の艦長の名は左の通りで御座います

是等の人が艦隊司令官の命令に由り、南山攻撃の陸兵援助の爲め、金州灣に達せられたのは丁度廿五日の正午で、乃ち島村聯合艦隊参謀長から、與第二軍司令官に通牒のあつた通り、少しも時刻に間違ひは無かつたが、何にしる灣内の波が高く、濠家屯の敵壘を攻撃するには、其の照準が定まらん恐れがある

筑紫艦長(分隊長)	海軍中佐	西山保吉
平遠艦長	海軍中佐	淺羽金三郎
赤城艦長	海軍中佐	藤本秀四郎
島海艦長	海軍中佐	林三子雄
水雷司令兼艦長	海軍少佐	關重教
全艦長	海軍大尉	森本義寛
全艦長	海軍大尉	和田博愛
全艦長	海軍中尉	平其雄

ので、或る一地に假泊して其の風波を避け、明くれば廿六日午
 前五時、天気も餘程静穏になつて、陸軍の方では既に砲戦を始
 めて居る模様であるから、全六時の頃から赤城島海の二艦と、
 水雷艇の一隻は、引き汐で餘程の困難を極めたにも拘らず、段々
 々と陸近くに進み出で、敵艦に向つて砲撃を加へました。所
 が敵もさるもの少しも恐れず、直様之に應じて砲弾を交へまし
 たが、不幸なものは未だ二三發も打出さずや打出さんのに、敵の
 彈丸空を切つて鳥海の前甲板を擦過し、之が爲め分隊長河野大
 尉は負傷し、下士以下二名の戦死二名の負傷者を出しました。が
 モ一午前八時頃になりまして、敵の砲臺の海陸の挟み打ちに
 口したのか、一時沈黙の姿となりまして、是れにて艦隊の
 方でも砲撃を中止しました。が、程なく第四師團の兵が砲火を
 して、浅水の海中を徒渉し壯烈に前進するのを掩護致されまし

た、斯く陸軍は全力を擧げて攻撃するにも拘らず、敵は頑固に
 抵抗して再び砲撃を始めました。我艦隊の方でも少しも猶
 豫せず、之に向つて猛烈なる砲火を浴せかけられました。た
 流石の敵も之には餘程弱つたと見へ、殊に陸軍は必死の勢ひで
 進んだのだから、敵もト一、耐へ切れず、午前十一時頃には
 殆んど退却して、南關嶺方面に逃出しました。ソコで陸軍は逃
 るを追ふて進まれるも併し海軍も之にて任務了れりと云ふ
 は無いから、更に吃水の浅い島海と赤城とが、陸地近くに進
 んで、南關嶺の敵を砲撃し、遂に陸軍をして同地を占領せしめ
 られました。此の砲撃中に敵の一彈來つて、馬海艦の舷側に
 發し、艦長の林三子雄君が戦死致され、少尉佐藤己之吉外下士
 卒三名の負傷がありまして、是れは南山の攻撃に付て、順序上
 から概略お話しする次第で御座いますから、皆さま悪からず御

読み取りを願ひます
 お話しは少しく後戻り致しますが、一寸申上げて置くことが御座
 います、全体此の砲艦は廿五日から出て来て、廿六日早朝にか
 け砲撃すると云ふ、聯合艦隊参謀長からの通報が、第二軍司令
 部に致されましたとは前述の通り、簡様に参謀長から確かな通
 報がありながら、廿五日は日没まで何の沙汰も無い、ソコでモ
 一急々砲艦は出て来ないであらう、何か故障でも出来たのであ
 ろうと、頻りに奥軍司令官も心配して居られたが、砲艦の来な
 いとは一應聯合艦隊参謀長まで通報して置かうと言ふので、軍
 参謀長落合少将から、島村艦隊参謀長宛て一の通報を發せら
 れました、其の大意は
 本日金州灣に来るべき軍艦は出發せしや未だ見へず、軍は
 今夜半より蘇家屯高地を攻撃せんとす

簡様なものであつたが、其の後奥軍司令官は、速も軍艦は當て
 にならんと思はれたが、攻撃に關する命令を左の如く下されま
 した
 一、軍は艦隊の協力を待つことなく夜暗に乗じて南山の敵を
 攻撃せんとす
 二、第一師團は現在の陣地を固守し明日午前四時三十分を期
 し金州城東南角より七里庄南方約五十米突の地點に亘る線
 に到達し爾後攻撃計畫第三期の如く攻撃を實施すべし
 斯う云ふ大意で御座いました、此の命令は第一師團に出たの
 であつて、他の師團のも大同小異であれば略致します
 軍司令部は簡様な御決心で、モ一海軍は當てにはせぬと云ふと
 になつて居ましたが、只今申上げました通り、砲艦から砲撃を
 始めましたので、奥軍司令官は落合参謀長を始め、其の他の幕僚

と共に前面の敵を御覽になり、又は砲艦や水雷艇隊の砲撃を眺めて「ヤーどうも宜い具合じゃつた、是れなれば大丈夫目的を達せらるゝであらう」と奥司令官始め何れも殊の外喜んで居られます、其の内に或る副官が司令官に向つて「閣下大分我砲兵も前進致しましたが、之には工兵隊が餘程の働らきをヤツて居ります、アレを御覽下さいアノ通りで御座います」と其の方面を指さしますので、奥司令官も其の方面を眺めて「ナル程工兵も能く働いて居る、兎角工兵と云ふものは餘程難儀な役だ、併し何うも甘く行つた、機會が大分熟して來たらしい」と言つて居られます、中、モ一第四師團の歩兵はボチ／＼前進を始め居ります、丁度午前八時とも思ふ時分に、敵の野砲四門か五門か、非常に打ち立てられた爲めか、南山からして蘇家屯の方に移り、ソコから非常に第四師團の歩兵に向つて砲撃を致しま

した、丁度此の時分が野砲兵第四、第十三の兩聯隊が、逐次前進を始めて歩兵の前進を援助して居つた所で、モ一九時になつたら此の方面の敵砲兵は全く沈黙致しました、併し是までの内に第四師團には、歩兵が一發も敵に打たずして負傷せし者が大分にあります、第一師團はどうかと云へば、第四師團の丁度左りの方に突出せし場所があります、其處へ第一師團兵が居られたから、丁度敵の方から打つには一番宜い所なる所です、ソコで第一師團にても大分損害が御座いました、何うしても第一師團は其の位置を去つては、スツ前進を云ふ時具合が悪いから、其處を去らずして遂に午前八時三十分まで其處に居られました、此の時直に第一師團は前進すべしとの、奥司令官からの命令が参りましたから、ソコでサ一前進と云ふので、非常の勢はひでドン／＼進まれましたが、此の時敵は所々に機關砲を

据へて居て、一時に勢ひ鋭く打出したから溜らない、バタリバタリと其處にも此處にも打倒され、暫時の間に將校下士卒に多数の死傷者が出来ました、ソコで味方は立止まつては敵に向つて打ち始め、又た「前へー」の號令にて進んでは驚れ、又た停まつては又た進み、又た打出しては又た進むと云ふ様な具合で、三四回も止まつては打ち又た前進したので、敵に近寄ると約四百米突の所まで進んで参りました、ソコで味方は各隊一齊に「連發打かよれー」、急ぎ打方打かよれーの號令で、非常な勢ひで打かけたが、何分味方は廣い所で地物の據るべきものが無く、全く體を現はして打つが、敵は之に反し散兵隊に銃眼を設け、其處から味方を狙ひ打ちにするから、如何に味方が打つても敵に當るか當らぬか懸張り分りませんか、味方は體を現はして居るから、バタ／＼と驚れるのが立派に分る、此の時野

戦砲兵第一聯隊、同第十四聯隊は、味方の歩兵の苦戦を眺めて「ヤー」是れは大變だ、餘ッ程歩兵は苦戦に陥つて居るぞ、是れは一時も早く援助せんければならぬ」と歩兵を援ける爲めに非常の速度で打出されたが、何分散は要害に據つて居るから、砲兵の援助も思ふ様に功を奏しません、此の時奥司令官は參謀長其の他の副官と共に、各方面を見て居られました、第一師團兵が非常の苦戦に陥つて居るのが明かに見へますから、奥司令官は「是れは何うも第一師團は非常の苦戦じゃ、如何にもンレでは兵が不足な様だ、宜しく」と云ひつゝ軍司令部に豫備隊となつて、居る歩兵第三聯隊（第二大隊缺く）を其第一師團に増加致されました、ソコで第三聯隊は「ヤー何うも漸々運が向いて来た、最初から軍の豫備隊となつて、今度は軍見物かど諦めて居たが、是れは何うも面白くなつて来た、ヤー確かりや

れく「今日が死時だ、ヤーッ」と云ふ聲と共に、砲銃火を冒して進んで参られました。此時敵から發しまする砲は皆な機關砲で、大砲よりも此機關砲がイヤなもので御座います。ソレで今また許りの第三聯隊の歩兵も、見る／＼内に大分の死傷者が出た。全体此の第一師團の進まれた方は、南山の敵の易い所で御座います。ソレでナニ譯は無、アノ突角は直に取れると云ふ勢ひで、第一師團はソレに向つて進まれたが、其の取られ易い危険な所丈けに、敵でも中々油断は致しません。其處には他方面よりも一層堅固に工事を施し、機關砲も餘程澤山据へて居ます。ソレで地形上から云へば取れ易い所はか、右申上ぐる通り防禦工事の充分なる上、機關砲が澤山に備へてあるから、中々容易には攻略する事が叶ひません。ソレな具合だ

から折角進んで四百米突まで漕付けたが、サー夫より先きは一歩も進まれません。進まれないと云ふことは無いが進めは死ぬる。が受合ひであるから、止むなく一時停止を致しました。丁度此の時、午前九時半から十時頃でありましたが、敵は又々連射の砲八門を、大房身南方高地に持出して、其處から非常に打出しました。ソレから又た記家屯東北方の散兵隊に敵の歩兵を増加し、味方の進んで居る丁度左側面の散兵隊に敵の歩兵が増加し、艦からして大砲を打出しました。サーそこで溜らない、前から

は新たに來る速射砲で打ち立てられ、記家屯の方面からは歩兵から打出される。夫れに和尚島の砲艦から打出す彈丸は、丁度後ろから打たれる様な理屈になつて來たから、第一師團は一時に非常な死傷者が出て、中隊長以下將校計りでも大分の死傷

がありましたが、此の時味方の第一線は、前に鐵道線があり、其
 の線路の所までヤツと進んだが、何うしても夫から前には進む
 とが出来ない様になつて参りました。第三師團の方は何うだと申しますと、矢張り之も同様で前進は
 致しました。之も大分の死傷者が出来て、鐵道附近から先き
 は一歩も進めません。進まうとすれば、鐵道附近から先き
 に乗込むと出来ません。ソコで、敵の状況は非常の御心配で、
 軍司令官の方へは屢々苦戦の状況を報告致されました。其の内
 に敵の砲艦から、陸戦隊を組織して小蒸汽に乗せ、紅土涯附近
 に上陸を始めたから、之を見たる我陸軍將校の人は「ヤ、生
 意氣千萬な奴、陸戦隊の上陸を始めあがつた、是れはひどい
 だ」と其處にも此處にも之に目をつけて居られたが、此の時
 第三師團が一番此の陸戦隊の方に近く、又た敵艦から大砲も打
 か

けられたが、其の砲弾も第三師團の方か一番損害を與ふる場
 になつて居ります。ソコで軍司令官は第三師團も苦戦も第一師
 團と同様だ、第三師團の方は夫れに兵數も少ないから、ヨシヨ
 シ此の残し置いた豫備隊を出して、之を第三師團に増加しよう
 と云ふので、初め申上げた軍司令官の下に豫備として残してあ
 る、歩兵第三聯隊の第二大隊を直ぐ出すとに相成りました。併
 し司令官の下に居る豫備兵を皆な出して、司令部を丸裸にする
 譯には参りませんから、申譯に一ヶ中隊を残して、他は悉く派
 遣せられました。何うも敵の陸戦隊がドン／＼進んで
 第三師團長大島中將閣下の居られる所に向つて参ります。此の
 時第三師團長の下には餘り豫備兵も居ない、前進部隊の十八聯
 隊など最も苦戦の最中なれば、大抵師團の總豫備隊も繰り出し
 て仕舞つて居るから、大島師團長は「オイ副官々々、アノ陸戦

隊は早く叩き出さんと宜しくない、何でも早くせねばならぬ」
と云ふので丁度居合した工兵と騎兵とが、一時にバラバラと
ツと飛出しました、ソ一すると敵は砲艦から上陸した陸戦隊で
あるから人数も余程少ない、今ま工兵と騎兵が来るのを見て、
コリや溜らぬでも思ふたのが、一戦をも交へずして逃しま
したのには、我軍に取つては非常な仕合で、之が若し日本人であ
つたならば、折角上陸して進んだ以上、いくら小人数でも皆な死
ぬるまで働いたら、夫れこそ大變であつて、大島師團の方では
人数は少なし、何う成り行くか知れなかつたか、僅かの工兵騎
兵に追はれて逃出して仕舞ふたのは仕合せで御座いました、彼
是する内、モ一午後一時頃となりました、けれどもモ一此の時は
随分激戦中ゆへ、晝食も何も出来る所の話ではありませぬ、間
にはあつた所もあるが、何れもヤツと水で飢を癒やして戦ふて

居たが、何方各師團とも第一線に在る者は非常な苦戦ゆへ、司
令官の下へは苦戦々々の報告計り、各参謀方は軍司令官の前に
参られ「頻りに苦戦の報告が各隊から参りますが、之は如何致
したら宜しう御座いませう」と少し考へあり氣に申されますと
奥司令官は「イッかな最初の決心を翻される模様も無く「ム一宜
しく分つた、苦戦の報告に接するは覺悟の前だ、宜しい
く」と遂に一時三十分になつてから、直ぐに命令を下されま
した、其の命令と申しますは、
第一師團は如何なる困難に遭遇するも攻撃的に前進すべし
第三第四師團は之に連繫して攻撃すべし
簡様な命令で御座います、ソコで第一第三第四の三ヶ師團長は
此の命令を受取りて「ム一成程、司令官は斯う云ふ御決心だ、
然らば我々も斃れても構はん、サー豫備隊も何も悉く繰り出し

て仕舞へ」と云ふので、各自豫備隊を第一線の方へ悉く出され
ました此の時一層又た味方の砲兵は大砲を打ち、我歩兵の前
進に對し援助して居りますが、進んでも敵の機關砲が烈し
く、何うしても敵壘に近づくとは出来ません、ソコでも第一
第三の兩師團の如きは、愈々是れは心かぬ、いくら命令でも師
團兵を塞殺しても前進する譯には行かん、師團兵が皆な戦死し
ても南山が取るゝなら遺憾は無いが、只た敵の的になつて死ん
だ許りで功を奏せんではダメだ、どうせ是れは暮るゝを待つて
夜襲の外は無いと云ふ人も御座いました、其の内に第四師團
の第七旅團長西島少將が、宜い所を見付けて味方の砲兵に砲撃
を始めさせ、之が動機となつて敵が潰散を初める、味方の三ヶ
師團が突撃の所、各聯隊大隊中隊長其他が個人の働らきは項を
逐ふてお話しするとに致します

さしより第四師團の方からすれば、旅團長が西島少將と安東少
將、是れは以前に御話し申したから、重複にはなるけれども、
今茲に第四師團の歩兵の前進を記すに就いては、二名の旅團長
及び聯隊長大隊長等の御話しをしないと、一体に御話し順序
が盡きませぬから、重ねて一言して置きます、
西島少將の率かれたのは、歩兵第八聯隊と卅七聯隊の二個聯隊
で、卅七聯隊長が川村大佐、第八聯隊長が乃美大佐、それから
第八聯隊の第一大隊長が藤岡少佐、第二大隊長が勝野少佐、第
三大隊長が下江少佐、第卅七聯隊の第一大隊長が竹迫少佐、全
第二大隊長が伊藤少佐、全第三大隊長が高木少佐、と簡様にな
つて居りましたが、其の中の高木少佐は、其の頃元山に行つて
居られたから、此の南山の戦争には、参加せられませんでした
そこで西島少將は一個聯隊と二個大隊とを率いて居られる譯で

御座います、然るに此の第八聯隊といふのは御承知の通り、全
く大阪市及び其の附近出身の兵であつて、明治十年の頃には、
全國中第一番の弱虫の名を取つた兵で、其の頃の悪口にも「又
敗けたか八聯隊」といふ位で御座いました、そこで西島少將も
此の大坂の第七旅團長になられた當初から、飽くまで又敗けた
か八聯隊といふ悪口は御承知のことです、御座いますから、萬一戦
争でも始つて、自分が其の旅團長として、此の大坂兵を率いて
行つて、又敗れたか八聯隊といはれる様なことがあつては相濟
まぬから、今度の戦争のある時分までは、自分が此の旅團を動
かすに居て、充分の教育を施した上で、此の大坂の兵を率いて
行つたなら、屹度立派に第八聯隊の名譽を回復して見せようと
いふ御考で、着任早々から、既に行軍を始められました、其の
始の行軍といふは、至つて近距離であつて、先づ二里か三里の

所で試験的にやつて見られた所が、成るほど又敗れたか八聯隊
と悪口するものも、無理のない所がチヨイ／＼御分りになつたら
し、御座います、其れは何かと申しますと、大坂兵は九州兵の
様に足が強くはない、僅か二三里の所でモ一隊伍を離れて、軍醫
の厄介になる兵が多く御座います、これでは逆でも眞實の戦争
は出来ない、兎角充分に健脚に仕立てなければならぬといふの
で、他の聯隊に比すれば、行軍の数を非常に増加されました、
所が始は三里位の距離で行軍し、其れから五里となり七里とな
り十里となるといふ様な風で、屢行軍を致されましたが、後
は五里も六里も駆足の行軍をやるといふ様な、随分烈しいやり
方を始められました所が、其の効驗空しからず、流石の弱虫の大
坂兵も、段々足が強くなつて、後には餘程の成績が擧りまし
た、それでモ一是れなれば足だけは宜しい、是れからが精神教

育だといふので、西島旅團長は其の後行軍の後には、必らず精
神上に關する講話をなすとか、種々の方面から大阪兵の頭に充
分御吹き込みになつたので、稱九州邊の兵に劣らぬ様になつて
参りました、そこで今度日露の戦争が始つて、サ一愈々今日か
ら出兵といふときに、聯隊長の乃美大佐が第八聯隊、乃ち大阪
出身の兵であるから、或る將校の方が「オイ乃美君、君は又敗
けたか入聯隊長で出征するといふが、戦地では鷹骨が折れるだ
らう」と揶揄されました、然るに乃美少佐といふ御方は、日清戦
争の當時はまだ中隊長時代であつて、平壤包圍攻撃の時は、七
星門方面から攻められた、戦争には充分経験のある人であるか
ら、其の揶揄れた將校に向つて「ナニ其の時代の大阪兵と今の
大阪兵とは、全く教育が違つて居るから、今度我輩が此の大
阪の女武者イヤ女の様なとこれまでいはれた兵を率いて行つて

どの位の働きが出来るか、其れは一戦争あつた後にドーか評し
て呉れ給へ、茲へ一寸出来合の都々一があるから、一つ御覽に
入れて置かう」と手帳の一枚を引き切り書いて出されたのを見
ると
浪速女に鎧を着せて巴御前にして見せる
といふ都々一で御座います、そこで始め悪口した將校も「成る
程これはうまい、こういふ風なら乾皮役に立つに違ひない、果
して此の都々一の通り行はれたら、獨り大阪兵の名譽のみなら
ず、我が日本國の幸福である、實に此の都々一は氣骨があつて
面白い、これは後日の爲め保存して置くから」といつて別れら
れたと申します、さて個様の意氣込で大阪兵を率いて行かれる
聯隊長も、是非今度は勝たせたいといふ考がある、のみならず
西島旅團長が、充分年久しく萬事に注意して教育された大阪兵

であるから、此の南山の戦争の如きは、實に立派な勳であつて
 此の一戦で又敗れたか八聯隊といふ不名譽の名稱を回復致しま
 した、
 これは餘計な御話を致しましたが、さて五月の廿五日といふ日
 になりますと、丁度此の日が南山攻撃の當日と定つて居りまし
 たが、来るべき等の海軍が来なかつた爲め、其れで南山攻撃は
 中止となり、愈々廿六日總攻撃といふことに相成りました、そ
 こで西島旅團長は龍王廟といふ所に旅團兵を集會させ、ソし
 てそこで訓令を發せられました、其の訓令といふものは、これ
 を平たく申しますれば、龍王廟の前に一本の樹木がある、そこ
 で其の樹の向つて左の方が歩兵第卅七聯隊、其れから右の方が
 歩兵第八聯隊、乃ち目標は此の樹木であるから、間違ひのない
 様兩聯隊が左右に分れ、必らず入れ亂れにならぬ様にとの主意

で御座いました、然るに此の時敵の砲兵から、ドーンと一發
 飛んで来たのが、丁度其の西島旅團長が聯隊長方を呼んで訓令
 を下ださるゝ、ホンの目の前に落下致しました、これが爲め忽
 ち二三の死傷者を生じました、そこで旅團長閣下はこれはいけ
 ない今少し先きの方へといふので、直様そこから少々前の方に
 進まれました、所が又そこへ敵弾が二三發飛んで来て、今度は
 將校以下五六名の死傷が出来ました、そこで西島旅團長も「こ
 れはもうも不思議だ、此所は敵の砲臺からは一寸も見へぬ筈だ
 其れにどうも二發は二發ながら、うまい具合に此の集合地に飛
 んで来るといふは、一圓合點の行かぬことだ」といひつゝ其の
 前面を見られると、一寸そこに死角があるから「ヨシあれまで
 行け、あれまで行けば大丈夫だ」とズツと其れまで進んで参ら
 れました、此の死角といふのは軍人の言葉で、普通の人は一

寸分り悪いが、御婦人や小供衆の爲めこれを平たく言へば、敵の彈丸の來ぬ所危険のない所といつた様なもので、御座います、所がそこへも又二三發の敵彈がドン／＼やつて参りますから、「これは實に危険だ、敵の間接射撃の巧妙のには驚いた、どうして斯んなにうまく行くだらう」と一同不審に堪ない有様、如何に露兵が間接射撃が巧妙であつても、斯う進めば進んだ様に退けば退いた様に甘く彈丸を送ると云ふは、如何にもド／＼も不思議の至りだ、露兵は何か不可思議の魔術でも知つて居るのであらうかと、將校方は申すに及ばす何れも只だ呆るゝのみで御座いました、ソコで或は進み或は退き敵彈の飛來を避けて見られるが、矢張り相變らずヤツて來るから、一層不審の度を高め居られる内に、或る特務曹長の方がセツセと駆つて來て「諸君、アレあの海上を御覽なさい、實に惜しい奴ではありませんか、

アノ通り舟から旗を以て敵に信號を致して居ります」と申しますから、旅團長を始め重なる將校方が御覽になりますと、成程遙かの海上に數人の支那人が小舟に乗り、何か白い旗とか赤い旗とかを出して信號を致して居ります、之を見られた西島旅團長は「ヤ、成程信號をして居る實にド／＼も氣がつかぬであつた、これはよいものを見付けて呉れた、實に此の發見は抜群の功だ、アレ／＼あの通り旗を振つて我が軍の進退を合圖して居る、之れでは敵軍の間接射撃が甘くないつて、當るのも無理のないことを致して居つた、サ、早く彼奴を引き捕へて來い」といふので血氣に逸る面々は、吾れ先きにと駆け回つてヤツと一雙の舟を捜し出したが、然し其の舟がド／＼も宜しくないから、海軍の方、に信號して艦載小蒸汽を出させ、其れで其の支那人を引き捕

へて見られると、其の人数が都合六人で何れも一曲あるべき面魂の若者で御座いました、其れで差寄り直ぐに通譯を呼んで、段々調べて見られると、其の中、の長とでもいふ様な奴は随分頑強で、中々我れの取調べに對し白状を致しませぬ、そこで一同が寄つて掛つて、彼等が敵對舉動は既に明白である、之れに向つて白状も糸爪も入つたことではない、サーヤれくといふので、撲つ蹴る踏むといふ様な非常な目に合せたので、漸々のことに白状して露兵の爲めに頼まれ、止むを得ず旗信號をしたといふことであつたが、其の實は大分金を貰つて、喜んで遣つた仕事らしいから、エー面倒だ、コンな奴は取調べても取り調べんでも、何の益のないことだ、早く叩き切つて仕舞へといふので、直ぐに其の六名のチャンの中での長ともいふべき奴を斬り殺しました、そこで残りの奴も矢張り露兵の肩を以つて働い

たものだから、何れも同罪と見て殺すことになつて居りました、が、モ一一人殺したから其れでよいではないか、アノ様にツ一泣いて居るから助けてやれ、之れを殺した所で勝つべき軍が、敗けにはならぬモ一宜い加減に追い放せ、といふので、西島旅團長も亦たソ一ゆふ御積りであつたから、ツイ残りの奴は皆追放らふて仕舞いました、然るに前申し上げた通り廿五日の總攻撃は中止致されましたが、廿六日の朝は是非とも總攻撃を行はる筈で、例へて海軍の方の援助がないに致しても、早々は待たれぬ事情になつて居りますから、廿五日の夜の中に金州を攻め取つて置かぬといふと、翌日南山に向つて進むことが出来ませぬ、そこで師團長閣下の命令で十九旅團長の安東少將が歩兵の四ヶ大隊を率いて、廿五日の夜金州城に向つて、攻撃を始められました

た、然るに此の夜は非常の豪雨であつて、殊に雷鳴烈しく電光は眼を射て、實に暗いものではない、全く咫尺を辨せぬといふ位で、而も泥濘膝を没するといふ有様であるから、攻撃前進の命令を受けた安東少將の隊も非常の困難で御座います、さうして工兵が此の歩兵に付いて行つて、金州の南門を打ち破ることになつて居たから、歩兵の援護に由つてズン／＼前進を始めて居たが、只今申し上げた通りの雷雨、而も眞つ暗がり道が分りませぬ、之れが爲めドリしても思ふ様に進むことが出来な、漸くのことには金州南門に迫り着いたから、工兵は必死となつて其の雷雨を冒して爆薬を装置し、其の爆薬に三度程點火致しました、三度は三度ながら火が付きませぬ、其の中に敵は之れを覺つたものと見へ、打ち出したの打ち出さぬのではない、非常の勢で敵の如く打ち出しましたから、忽ちに工兵の中

に負傷者が出来ました、然るに此の工兵は僅に六七名であつて其の中に負傷者が出来ては、モ一工兵もシツとしてそこには居られませぬ、工兵が其の門を破ることが出来ないので、歩兵もそこへ突撃の出来る筈がない、そこで十九旅團長安東少將は、止むなく一度退却しようといふので少しく退却を始められました、た、さうして安東旅團長から第七旅團長西島少將の許へ、一人の傳令をやつて報告を致されたが、其の報告といふのは金州城南門破壊のことは失敗に終つたといふ意味で御座いました、そこで西島七旅團長は、金州城攻撃が失敗に終つたといふのみでは、ド一も不得要領な報告である、それに第十九旅團の退却をしたのは、之れから位の距離であるかと尋ねられると「左様で御座います、先づ八百米突位であらうと思ひます」「八百米突だ、其れでは此の七旅團の方とは餘程近くなつて居るが

此の暗夜に其の位退却して、安東はさうする積であらう、副官
々々、オイ村岡副官、今此の十九旅團の方から来た傳令と一所
に同行して、今一度ナゼ退却をしたか其の事を確かり尋ねて
来て貰いたい、「ハイ承知致しました」直ぐに村岡大尉は其の十
九旅團の傳令と一所に、其の眞つ暗がりや幸うじて参られまし
た、さうして安東旅團長に向つて退却の理由を尋ねられると、
「イヤ別に仔細はない、見らるゝ通り此の雷雨で、殊に咫尺を
辨せぬ暗夜である爲め、さうして金州城門を破壊することが
出来ぬ、其れで茲まで退却したのだ」と申されますから村岡副
官は、大急ぎで第七旅團司令部に歸り、此の旨を西島旅團長に
報告致されました、さうすると西島旅團長は「ナニ門が破れ難
いから退却したと、ソイヤ一君先刻の傳令のいふたのと同様だ
ンンなら行つても行かぬでも同じことヒヤ、ドン己れが行つて

確めて来よう」と西島旅團長自ら暗夜を冒して参られました、
さうすると其所に安東少將が居られましたから「オイ安東君
リヤ一一体ドしたのだ」「イヤ西島君か、元來金州城の各門中、
東西北の三門は何れも固く閉ざして居つて、餘程具合が悪いと
見たから、南門に向つて工兵に破壊作業を行はせたが、例の豪
雨の爲めド一も思ふ様に發火しない、だから兎角明け方を待つ
て仕事をせぬでは六ヶ敷い、逆でも行けぬと認めただので、先づ
夜明を待つ爲め、此所に散兵壕を掘らせて居る所だ」と申され
ますから、西島少將が之れを見られると、成る程散兵壕を掘つ
て居ります、西島少將は少しく笑いながら「オイ安東君これは
いけないではないか、夜だから宜い様なもの、夜が明くれば
南山からドン／＼やりつけられる、一体此所は南山の眞下にな
つて居るではないか」と申されると安東少將も始めて氣が付い

て「成程ソージやつたの、これは気が付かなかつた、して見ればドーでも君の所の邊まで退却をせすばなるまい」といふので直ちに退却を始められました、實に此の時の退却は其の暗いのに保はらず、秩序整然として一糸亂れず、立派に集合地に引き上げられました、御話は少々前後致しますが、最初西島旅團が後から前進を始められた時は、モ一十九旅團は金州を取つて仕舞ふたものと思はれたので、ズン／＼と十九旅團の進んで居る金州の方面へ、第七旅團も翌日の攻撃準備があるから進んで居られると、俄かに銃聲がバラ／＼とやつて参りました、其れが何所から打つのか少しも方角が分りませぬ、そこで味方の方では「サー敵だ、油断をするな」と忽ち其所に展開をされる、其れと同時に藤岡少佐が弾丸に當つてバツタリと斃られました「ヤッ大隊長殿

ではないか、藤岡少佐が御負傷だ、何所をやられたのであらう」と各將校方が駆け寄りて引き起こされると、ドーも當り所が悪るかつたと見へ、モ一人事不省所ではない、全くの戦死で御座います、其の外にも段々死傷者が出て来る、ソ一するとモ一西島旅團の方でも打ち出さぬければならぬ理屈だが、當てもなく無暗に打ち出すことは出来ませぬ、出来ぬのみではない、得てコンナ時には味方打ちをするものです、けれどもモ一或る方面はバラ／＼と打ち出しました、ソコで西島旅團長は「ヤ、いざーした、今此所で打つ所ではない、止れ」と制止されまされども、相方の銃聲で號令が分らぬかして、少しも止る氣色が御座いませぬ、止むなく打ち方止めの喇叭を吹かせられましたから、ソコでバツタリ打ち方が止ります、ソ一するど向ふの方でもいふものか銃聲を止めたから、西島少將は

歩兵中尉	全	全	歩兵大尉	全	歩兵少尉	全	全	歩兵中尉	全	歩兵大尉
乃木勝典	蟻坂七郎	生沼昭二	松永直亮	重傷	長崎隆次	村岡猪久	鹽澤登四郎	鈴木順平	岡村誠	野本環重
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
添田壽雄	寺崎由之助	淺野丈夫	宮本秀一		佐藤壯	奥村莫耶	桑原矢六郎	佐藤虎太郎	大木三郎	唐渡貞吉

少しく進んで、其の隊は何聯隊か、其の隊は何大隊かといふ風で、道々暗がりの中を尋ね回り、漸々に無事相済んで立派に退却をせられ、そこで第七旅團と第十九旅團との連絡が付きまして御座います、そして此の廿六日の午前四時頃には、兩旅團も勇しく出發せられましたが、此の兩旅團の向はれた方面は南山の西北に當り一の突角がありまして、其れが敵軍となつて居るので、此の敵軍に向つて進まれました、尙ほ兩旅團が敵軍に向つての突撃苦戦の状は、餘りに長くなり、南に於る、を次編にお話しするとし、茲には参考の爲め金州第一師團戦死負傷者の氏名を申上げて置きます

全	步兵少尉	全	全	步兵大尉	步兵中佐	全	全	砲兵少尉	全
麻生賢幸	柴田三作	芝川又三郎	福永作十郎	廣谷儀一郎	北村他喜藏	藤岡銃次郎	戰死	水原源治	羽木伸
步兵特務曹長	全	全	全	全	步兵中尉	步兵少佐	全	全	全
藤井一辰名	宮津隆成	佐藤幸次郎	石津完造	松岡包久	高田宗城	仙波久修	仙波久修	松原幸七	松原幸七

第四師團 下士卒 一四八名

全	全	全	步兵少尉	全	全	全	步兵大尉	步兵大尉	全	步兵大尉
竹内元三郎	山田政一	金山守道	野原賢輔	石黒豊明	前澤尙正	野田久吉	佐藤鶴松	田村勝市	輕中村彌七	鈴木義雄
全	全	全	全	全	全	步兵中尉	全	全	步兵少尉	中澤郷
猪飼要	村井清規	青木源治	安藤藤成	佐々木菊松	土川省三	今枝内藏之助	羽入三郎	加藤忠雄	中澤郷	中澤郷

砲兵大尉 窪田 全
 步兵中尉 水戸常太郎 小室
 砲兵中尉 梅津 亨
 工兵大尉 丹羽 篤男 一
 負傷 砲兵特務曹長 一
 全死 下士 五〇名
 戦死 下士 二〇名
 死傷 合計 四千四百八十五名
 内 砲兵 三十三名
 下士以下 七百十三名
 特務曹長 三名

夫れから次に敵の損害を申上げて置きます、夫れは南山占領の上其の邊に遺棄してあつた敵の死体は、我軍の手で町場に埋葬を致しましたが、其の数は將校が十名、下士卒以下約七百名位ひで、其の以前に汽車で送つたものも澤山あつたと申します又た俘虜となつたものは將校が三名、下士卒二十名で、其の他の分捕品の重なるものを申上げますと

傷 將校 百 名
 下士以下 三千六百五十名
 特務曹長 十二名

小銃 三百六十五挺
 同彈藥 四十一萬六千六百五十發
 大砲 九十二門
 同彈藥 八千九百九十六發
 内 重砲三十門、輕砲五十二門、機關砲十門

其の外彈藥車とか土工具とかの分捕品は、實に山の如しと云ふ
様であつたと申します、紙數に限りあり本編は之にて止め、愈
々次編に於て南山の占領に引續き、得利寺の大激戦をお話し申
します。

新講談
音曲入
日露戰爭談 (第五編) 終

明治四十年九月十五日印刷
明治四十年九月廿五日發行

定價金四拾錢

著者權所有
(日露戰爭談第五編)

著作者 美 當 一 調
發行者 此 村 庄 助
印刷者 吉 村 源 次 郎
印刷所 山 田 元 吉
大阪市南區順慶町通四丁目百七十九番邸
大阪市南區鹽町通二丁目四十一番屋敷
大阪市南區安堂寺橋通二丁目二十六番邸

發行書肆

此 村 欽 英 堂

電話東二千六百八十六番
振替貯金口座一〇五二九番

大阪市南區心齋橋通順慶町北へ入



57
176

